
弱さ故、強さ故

即席プリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱さ故、強さ故

【Nコード】

N9381C

【作者名】

即席プリン

【あらすじ】

両親を事故で亡くした月森優の妹に他の人格が乗り移る。それ故、環境や人間関係に変化が起きる。その後、優は不思議な能力に出会い、両親の事故の真相を知ることになる。

プロローグ

五月三日、僕の両親月森守と月森桜は飛行機事故で死んでしまった。

月森家でこぢんまりと行われていた葬儀に幕が下ろされた。

堅苦しい喪服をまとった人々が、一人ずつ僕と妹の藍に頭を下げ、それに対して僕たちも頭を下げ返事を返す。

一度も会った記憶が無い人も「元気に頑張つてね」と励ましの言葉を投げかけてくれたし、中には悲しみのあまり目の前で泣き崩れる人もいた。

そこまで多くない人々が一人ずつ家から出て行き、やっと家の中が静かになってきた。

もう家には叔父さんと叔母さん、それと僕と藍しか残っていない。僕を含めた四人でこれからのことを話し合った。

「優君、藍ちゃん。これからどうするの？」

椅子に座り、テーブルの上で腕を組みながら叔母さんが僕らの生活のことを聞いてきた。

叔父さん達の家で暮らすか、現在すんでいる月森家に残るか。僕は我が家に残りたいという意志を伝える。叔父さんや叔母さんに迷惑をかけると悪いし、引越が必要になるので色々と手続きがあるからだ。そして一番の理由は叔父さんが嫌いだったから……太っていて、笑い方が気持ち悪い。そんなヤツと一緒に住む気なんて全くなかった。

「僕はこの家で暮らしていききたい、この家を守り続けたいです、藍には自分の意見を尊重してもらいたいのでもし藍が叔父さん達の家引越しても、僕一人でこの家に残るつもりです」

「そうか……うん、分かった、優君は大人だね。藍ちゃんは、どう

するんだい？」

耳障りな気持ち悪い声で叔父さんは藍の意志も聞き、藍は真剣に黙って考えてから重い口を開いた。

「私は優兄と一緒に暮らすよ」

少し躊躇うような口調、その口ぶりから藍にはまだ迷いがあるようにも思えた。

「本当に良いのか？」

僕は念を押して聞いてみる、藍の幸せが本当にここにあるのか。藍自身のことなので意志を大事にして欲しいのだ。

「うん、優兄と一緒に住むよ、この家に残る」

「分かった、優君と藍ちゃんの好きなようにしなさい。でも、何かあったらすぐに連絡するんだよ」

「はい、叔父さん」

これで猫を被るのも最後だと思えば、いい顔をしてうなずけるものだ。

「うん、叔父さんも叔母さんも元気だね」

藍はおとなしくて、人見知りだが、ある程度の壁を越えるとそれも大丈夫な性格だ、超えられなかったらどうしようもないがのだが、そんな性格だから自然にあんな顔が出来るのだろっ、僕にはあんな狸にいい顔を作るのは絶対に無理だ。

「藍ちゃんも元気だね」

二人はゆっくりと立ち上がり、ハンガーに掛けていた喪服を着て、その足取りで玄関へ向かった。

僕たちもその後を追って二人を見送り、またリビングに戻った。

誰もいなくなり、やっと我が家には家族だけになった。いつもは四人いたのに、今では二人。いつもいる人がいなくなることはやはり少し寂しい、空間に空虚が生まれるような感覚で何か足りない様な気持ち。

一軒家のリビングがとても広く感じる、四人用のテーブルとその周りにちょこんと置いてある椅子も二つは利用価値を失ってしまっ

た。キッチン長く従えてきた主を失い、新しい主を迎え入れることになり、食器棚も約半分はもう必要無い。

家族の声を失っただけで部屋の中では声が響き、広さを感じさせる。そんな静かな広い部屋に藍の泣き声が響き渡った。

「優兄……」

僕のお腹に顔を埋めながらいつもの相性を嗚咽混じりで漏らしていた。

きっと恥ずかしがり屋で奥手な性格な藍のことだから人の前では泣けなかったのだろう、僕の服をちぎれんばかりの力で握りしめていた。

「藍……」

そんな藍に僕はどうすることも出来なかった。中学生の藍には両親の死はともつらいものだったのだろう。僕と一緒に買いに行っただけのお気に入りの眼鏡も外さないで、ずっと、ずっと、今までためていた涙を流し続けていた。

滝のように流れる涙を見ても僕は何もしてあげられない。そんな自分が情けなかった、ただ藍の頭に手を添えてそっと抱きかかえて時間が過ぎることをただただ待っていた。

この悲しみから藍を守ってやれるだろうか……両親の様に藍に笑みが溢れる生活を送らせることができるだろうか……不安な面は沢山あった。

——時が経ち、静寂が戻る。

ずっと泣き叫んでいた藍が、すすり泣き程度になるまでどれだけの時間が過ぎたのだろう。今ではすすり泣きも止まり、必死になって服で涙を拭き取っている。

「優兄ちゃん、ありがと」

まだ少し悲しい様な寂しい様な声色で、うつむきながらまだ完全に拭い取れていない涙を気にしている様だった。

「もう、大丈夫か？ 我慢しないでいいんだぞ」

うつむきながらも首を縦に振り、少し間を置いてからもう一度嬉しそうに首を縦に振った。

「うん、そうだご飯にしようよ」

いつもより少しおとなしい声で僕に言った。

「そう言えばもうそんな時間だな、簡単に作って食べようか」

背はほとんど変わらないのだが、父親は筋肉質だった。なので胸の辺りが少し大きめの喪服を脱ぐ。喪服をハンガーに掛けようとすると、強く握られていたのしわが付いていた。喪服にしわができるということは相当な力で掴んでいたのだろう。藍の方を一度見て、締め付けられる様な気持ちになり、ネクタイをゆるめた。動きやすい格好になったので僕はキッチンへ向かった。

冷蔵庫の中身を確認すると色々な食材がある、これだけ種類豊富だと何を作るうか迷ってしまう。

「こんな気分の時に重たい食事は嫌だ」

フルコースを出されても食べる気分ではないだろう。そう思い、冷凍うどんを使って月見うどんを作ることにした。

料理は僕も藍も作れる、普段なら二人で共同することが多いけどこんな時は兄らしく藍の負担を軽くしてやろうという僕の思いで自らキッチンに立った。

水が沸騰するまでの時間が異様に長く感じる、料理を始めてから僕らの間に一言の会話もない。物静かな雰囲気は苦手、だから僕は黙々とうどんのだし汁を作った。

沸騰したらすぐに調理を始める、調理といってもただうどんを茹でるだけなのだが、それでも調理は調理だろう。

うどんはすぐに茹で上がり、熱々のだし汁に卵を落として完成だ。二つのどんぶりを両手に持って椅子に腰掛けている藍のもとへ運んだ。

「ほら、食欲が無くても食べられるように月見うどんにしたから食べて栄養摂取だ」

「別に体調が悪いわけじゃないけど……」

藍は先ほどと変わらずおとなしい声だった。

両手を合わせ食べられることに感謝の意を表し、僕らはうどんを食べ始めた。

僕のどんぶりの中身はもう残り少なくなっている頃、藍は急に箸を休めた。そして僕を見つめてゆっくりと口を開く。

「……優兄はお父さんとお母さんが死んじやって悲しくないの？」

話し方は弱々しい、だが眼鏡越しに僕を見据えている目が少し恐かった。そして嫌な質問……なぜこんなことを聞くのだろうか。

「悲しいよ……でも、叔父さんに言っただようにこの家を守り続けたい。それに藍もこの家にいるんだ、家の主としてしっかりと藍を守らなければならない。だからあまり悲しいなんて思っていないんだよ」

悲しいに決まっている、父親は休日を僕らのために使ってくれし、母親はいつも優しく接してくれた。幼い頃から愛情を沢山受けてきた……でもなぜか涙は流れなかった。僕の両親に対する思いはこんなに冷たいものだったのだろうか……。

「そうだよ、悲しいよね」

藍はどこか辛そうだった、声はいつも通りの明るめの声に戻ったのだがおとなしさが残っているというか、冷たさのような感じが伝わってきた。

「気に障るようなことを言っただか？」

何か悪いことを言ってしまったのだろうか、さっきの聲が妙に頭の中で引っかかる。

「全然怒ってないよ？ まだちょっと気持ちが整理できてないだけだよ……うん、そうだよ」

むしろ死を思い出させる様なことを言ってしまった。でも、何となくだけ冷たい感じは残っていた。

「ごちそうさま」

両手できちんと合掌を作る。藍のどんぶりには少しうどんを残っている。

「折角作ってくれたけど、食欲が無いんだよね……ごめんね」

「構わないよ、寝るのか？」

「うん、疲れちゃったよ……優兄、おやすみなさいだよ」

そう言って立ち上がり、少し重たげな足取りでリビングを出て行った。

両親の死がダメージを与えているのだろう、藍の生まれたときには祖父母はもう亡くなっていたから死への耐性が無いのだろう。藍を守るということは藍の痛みを和らげなければならないということ。僕にできるだろうか、たとえできなくても守る、自分を犠牲にしてももう悲しい思いはさせない。

不安はある、今にも恐怖で逃げ出したくなるときが来るかもしれない。妙にそわそわと落ち着かない、だが僕は覚悟を決めた。

悲しい思いはさせないと心に誓った。

プロローグ（後書き）

自分の文章が肌に合い、この続きを読みたいという方は続きを
読んで頂きたいです。

評価や感想など頂けると更に嬉しいです。

第二章

太陽は沈み、空には月が綺麗に浮かんでいる。五月の風が木々をすすり笑いさせるように吹く。

綺麗な夜なのに僕はすることもなく、ただぼんやりと電気も点けずにリビングの椅子に座っていた。

目が冴えて眠れない。きつと両親の死が関係しているのだろう、涙は出なかったが心のどこかで喉に小骨が刺さったような感覚がある。

——しばらくの間考え込んでいた、なぜ泣けなかったのだろうかそれが頭から離れない。幼少時代の沢山の思い出が蘇ってくる、僕をここまで立派に育て、自由な家庭だったが道徳だけはたたき込まれた。「困ってる人を見たら助けなさい、見て見ぬふりは絶対にしてはならない」や「相手を喜ばせなさい、相手を悲しませることはするな」などの言葉を母親は僕らに言い続けた。

子守歌の代わりに聞かされていたので体で覚えてしまった、僕はその影響を強く受けて育った。母親は僕が生まれて余程嬉しかったのだろう、藍を泣かせたら仕置きを与えられた。

子供の頃はなぜ僕が怒られていたか分からなかった、けれど今は理解をして母親の理想通りに育つただろう。だから僕を知る人々は僕に対して優しいという印象を持っているようだ、友人には名前通りの性格だと言われたこともある。

そんなに優しい人が両親の死に涙を流さないなんて……やっぱり変だ。自嘲気味に笑いがこぼれた。

——夜もさらに更け、明日のことが頭によぎる。

「明日からまた学校が始まるのか」

葬儀などがゴールデンウィークと重なってしまったので、今年の長期休暇が無くなってしまった。また忙しい日々が始まると思うと

ため息が出てしまう。

明日は朝早く起きなければいけない、眠れなくても身体を休めた方が良さだろうと思い、全体重を預けた椅子から立ち上がる。

リビングを出てふらふらとした足取りで自室に戻る。自室は急な階段を上らなくてはならないので今の僕には結構な重労働だ。

階段を無事に登り切り、部屋に入ろうとドアノブに手をかけた。

……そのとき隣の藍の部屋からガタン、ガタンと変な音が鳴っている。何かが壊れるような音にも聞こえるし、大きな物が揺れているようにも聞こえる。テレビで見る地震の仮想体験の様な音が一番近いかもしれない。

僕は本能的に足音を殺し、藍の部屋の前まで来るとそつとドアに耳を近づけ中の様子を探る。

「……あはっ、どこ……どこにあるの……」

ほんの僅かだが、笑い声と何か探しているようなことを言っているように聞こえる。そして、なぜか苦しそうだ。

何なんだ、全く見当が付かない。そしていつもの藍ではない口調にホラー映画でも見ているのかと思わせられるが藍の部屋にはテレビが無いので違う。

「あつたあつた、あはっ。良かった……」

今度は苦しそうな声ではなく、明るくなった時の声。藍はやはり何かを探していたようだ、いったい何を見つけたのだろうか。そもそも自分の部屋であれほど苦しうになるまで探す物などあるのだろうか、無くしたら困るような物だとしても、そんな大切な物を自分からなくなるような所に置くだろうか？

——その後も息を殺してしばらく間ドア越しに部屋の様子を伺っていたが、先ほどの何かを見つけた瞬間から、藍は一言も言葉を発していない。

もしかしたらもう寝たのかもしれない……だが、寝たと憶測するにはまだ早い。……なぜならベッドに入る音が無かったからだ。

なぜ何一つ聞こえない、全くの無音が続くのだろうか。明らかに不自然……いくらドア越しでも何かしら物音が聞こえても良いはず、それなのに部屋の中は誰もいないような静かさ。

不安な気持ち、嫌な予感がする。

ドアをあけて真相を知りたい。藍は何をしてるのか、何を見つけたのか、分からないという不安と恐怖が僕を襲う。

だが今ここでドアを開けることは絶対にしてはならない、理由なんて無いただの勘。もしここでドアを開けてしまったら歯車が狂う、これも勘でしかない。真実は分からない、知りたいという気持ちは凄くある。けれど安易な興味で危険を冒すべきではない。

……明日、そうだ、明日聞けば良い。もしも明日、藍が知らないフリをしたらそれは聞いてはならないことだった、そう解釈すれば良い。いくら家族でもプライベートは尊重すべきである、僕が踏み込んで良い領域など家族というカテゴリの兄弟というほんの僅かな部分だけだ。明日にしよう、明日になれば今日のことは解決するんだ。

僕は念のため足音をできる限り消し、暗闇の中ほんの数メートルを慎重に慎重を重ねて歩いた。数メートル歩くだけで僕の脈拍は上がり、冷や汗が出る。自室に入るときのドアの音も出さないようにする作業が一ミリのズレも許されない精密作業のように思えた。

自室には安心感があつた。ここだけは絶対に守られている空間、そう思うと、藍にとつては藍の部屋が自分の空間ということになる。やはりさつきドアを開けなくて正解だったと胸をなで下ろす。

僕はすぐにベッドに潜り込み眠りについた、いくら自室だからといって何が起こるか分からない、だから逃げるかのごとく全身を隠すように布団を頭まで覆った。

*

朝は目覚ましの音ではなく、暖かい日光で目が覚めた。

昨日は藍の不可解なことがあってあまり眠れなかった。それでも疲れが取れるくらいは眠れた。

まだ気怠い身体に鞭を打ち身体を起こす、そして普段通り部屋の壁に綺麗に掛けられている制服に袖を通す。一週間前まではこれが日課だった、そして今日からも日課になるだろう。

気持ちを入れ替え、自室を出る。僕らは互いに先に起きたら相手を起こすという暗黙のルールがあった。今朝は藍に起こされなかったので藍はまだ部屋で寝ているということになる。だから藍の部屋の訪ね、ドアをノックをして一声かける。

「朝だぞ、早く起きろよ」

ドアは開けない、昨夜のことがあるからだ。普段は直接体を揺すって起こしていたのだが、やはり顔を合わせにくい。

「はい、分かったすぐ行くんだよ」

いつも通りの起き抜け声で藍は返事をする。部屋の中からはバタバタと準備をする音も聞こえてくる。

「朝食は僕が作るから」

食事を用意することを伝え、僕は急な階段を下りてキッチンに向かった。

朝食は簡単なメニューにした。目玉焼きとご飯、それにみそ汁にサラダ。これだけあれば十分だろう。僕が調理を始めると、すぐに藍がリビングに入ってきた。

「今日もいつも通りの朝ご飯だね」

笑いながら僕に言ってくるがこの台詞は皮肉にもとれる。

「満干全席でもご用意いたしましょうか？」

負けじと僕も紳士的な口調で対抗。

「それとも良いかもね」

「冗談言っていないで準備手伝えよ」

あっさりと返されたので僕は戦いから早めに身を引くことにした。藍は皿の準備や、テーブルを片付けを始めた。

調理を終え、テーブルへ運ぶ。藍はちゃんと手を合わせ「いただきます」と言ってから食べ始めた。

ふと思うのだが藍はどこか幼いところがある。僕はあの教訓を除いて他は父親に似ている、それに対して藍は母親に似た。母親はいつも「いただきます」を言っていた。子供の頃から藍も言っている。そんな当たり前のことになぜか笑みがこぼれた。

「どうして笑っているの？」

「何でもない、なんか昔を思い出して……」

言った後に後悔した、藍には両親の話はタブーだった。藍の方へ視線をやると藍はうつむいて黙り込んでいた。

結局その後は話そうとしても話しくく、お互いに一言も言葉を交わすことなく食事を終えた。

朝食を食べ終わり、しばらくすると藍は沈黙を破った。

「……優兄、今日学校休んでいいかな？」

先ほどよりは少しだが顔が僕に向いていたような気がした、藍は幼いと思っていたが、自分から立ち直ろうとする姿勢が見られたので僕の考えは少し間違っていた、藍はもう立派な大人なんだなど、でもまだ情緒不安定なだけなのだ……。そこに僕がデリカシーの無い言葉を放ってしまった。僕の方が幼いかもな……。

まだ迷いや不安があるだろう、何も聞かずに承諾した。

「学校には伝えておくよ」

「ありがとう」

しみみりした空気になってきた。

「気にするな、その代わり家中ピカピカに掃除だな」

「うん……ん？」

「汚いところは念入りに頼むよ」

首を傾げ、悶々と考えている。数秒後に手のひらを開いて腕を突き出し、待てというポーズをとった。

「いや、ちょっと待とう、確かに私は頷いたんだよ。でもね、そんな無理難題を言われるとは思わなかったんだよ。だから……卑怯だぞ！」

最後は無理矢理だ。

「卑怯じゃない、こんな狭い家なら一日もあればピカピカにできるって」

「無理、できない、絶対無理！」

実際、一日もあればすべての部屋を掃除するくらいは可能なのだが、藍は首をぶんぶん横に振り拒絶する。

「何事もやってみる。その後、無理だったら正直に謝る」

「言ってることは間違っていないんだよ……ただ人として間違っている！」

そろそろこちらが折れないと何を言われるか分からない。人であることを否定されたら次は何扱いされるのか気になるところだがそれはまた次の機会にしよう。

「冗談だよ、でも掃除はよろしく頼むよ」

「冗談なら早く言つてよ！」

「半分笑み、半分怒りなんて凄い技を持っているんだな……」

藍は笑いながら怒っていた。怒らせたのは悪いが、いつも通りの空気に戻った。

僕も食事を終え、身だしなみを整え、学校へ向かう時間となる。

「それじゃあ行つてくるから」

「行つてらっしゃい」

「家中ピカピカな」

「はいはい、わかつて……って無理だつて言ってるでしょ！」

そんなこんなで家を出た。

「おはー優ちゃん」

学校に着き、教室に入って席に着くとすぐに御堂有紗が近寄って

きて、手を振りながら声をかけてきた。

「何だ、有紗か、おはよう」

「何だつてなんだよ、悲しいなあ、昔はよく遊んだ仲じゃないか」

「ただの腐れ縁だ」

「ずっと学校もクラスも一緒だった運命共同体のこのワタクシにそんなことを言うなんて……」

「気色悪いからやめろよ」

確かにずっと一緒だった、家も近いし親同士も仲が良かった。子供の頃は良かった、有紗はまだ可愛さが残っていた。

今は百七十を超える身長、抜群の運動神経、綺麗に整った顔立ち、そこまでは良い。だが、有紗は性格を偽装し演じている。嘘で塗り固めた有紗は高校でもトップクラスの人気者、有紗に何かしたら僕の立場は危険だ。

「えへー、怒られちゃったよ」

後頭部をなでる様な動きをする。

「だから俺の前で演技するなよ！」

「演技だなんて……ひどい、ひどすぎるよ優ちゃん」

学校で普段通り話しているとすぐに演技をする。そのせいでクラスの人みんなから痛い視線を受けるのが日課になりつつあった。

「やめろって、後で男子にボコボコにされる」

「……狙ってやってるの」

僕の耳元でわざと小声で言う、しかも小悪魔ボイスで。本当に根性が曲がってる。

「それでさ、本題なんだけど」

だが突然珍しく、トーンを落として話しかけてくる。

「……その、優ちゃんのお父さんとお母さん……」

間を入れながら有紗は言ってくる、まあそうだろうな。葬儀には御堂家全員で来ていた、立派な花をもらい最後まで両親を見送ってくれた内の一人だからな。

「大丈夫だ、気にしないでくれ」

「本当に？ 藍たんも大丈夫？」

痛いところをつかれた。まだ少し両親の死を引きずっているだろう、だから僕は首を横に振る。

「やっぱりねえ、藍たんの性格と外見だとねえ」

「外見は関係ないけどな」

「だって、あんなに可愛くて、ロリロリしてるんだよ！」

有紗らしかった、少しは僕に気を遣ってるのか、それとも本当にそう思ってるのか、どっちにしても有紗は僕らのことを心配してくれているようだ。

「藍たんのあの性格だと、今日は学校行ってないね。というか行けないって言った方が良いかな」

「ああ、学校は休んだ」

鋭い読み、流石有紗だ。

「だって藍たんは外見を含めまだ子供だからねえ。よし、今日は優ちゃんの家に行かせてもらおうよ」

以外と外見よりは大人になっているのだが、無駄口を入れる場面でもないだろう。

「いいのか？ なら頼むよ、少しでもいいから藍を元気づけてくれ」
こんな時に有紗は本当に頼りになる、ありがたく恩を受け取っておく。

……でも、あの夜の出来事は言わなかった。有紗に余計な心配をかけさせたくないし、人に言ってよいことなのかどうかもまだ定かではないからだ。

すべての授業が終わり、有紗と校門を出て我が家へ向かった。

途中、有紗は家に「夕飯はいらないから——うん、食べてくる」と電話をしていた。誰も夕食を御馳走すると言っていないのに……本当に容赦の無いヤツだ。

我が家には十分もかからずに到着する。

「久しぶりだねえ、藍たん元気かな」

期待を隠しきれずに表情に薄笑いを浮かべながら、わざわざチャームを押して藍に出迎えさせようとする。

「意味の無いことをするな」

その行為を止めさせる。

「いいじゃんかよ」

つまらないヤツだなと言いたそうな顔をして僕を睨んでくる。

「とにかく入れよ」

「お邪魔しまーす」

玄関を開け、有紗を招待すると文字通り邪魔をしに来たようにも思える。

リビングに入ると藍はテレビを見ていた。

「お帰り優兄……あ！ お姉ちゃん！」

藍は嬉しそうに有紗のもとへ近寄る。有紗もニヤニヤと笑っていた。

「藍たんいつも通り可愛いねえ、身長も百五十五センチから変わってないねえ」

「え！ 何で分かるの！？」

「お姉さんの特技だよ」

その特技は異常だと思うが口に出したら何をされるか分からないので必死に出かかった声を飲み込む。

「楽しそうで良かった……」

安堵の息をつく。二人は久しぶりに会ったからなのか、とても楽しそうに笑っていた。これは有紗を呼んで正解だった。

「本当に変わってないねえ、髪型も、眼鏡も、身長も、服装も、声も、肌も、んでもって胸も全然変わってない」

藍の頬が赤く染まる、これは面白い。そこで有紗のため押しの一言。

「揉めば大きくなるよ、お姉さんが揉んであげようか？」

親父丸出しの有紗と、たこのように真っ赤な藍。

「お姉ちゃんだって、身長は伸びてるけど胸は全然無いじゃん！」

「男はこれくらいがちょうど良いと言つたさ」

まるで世の男について悟つたような語り口、そして両手を腰に当てて胸を張る有紗。

「でも本当に身長割には胸無いよな」

――殴られた。反射的に思ったことを口に出すのは危険だ。

「優ちゃんは放っておいて藍さんの部屋に行こうよ」

有紗は軽蔑に似た目で僕を見て、藍は大きく頷いて笑っている。

「じゃあ、優ちゃんは最高に美味しい料理作ってね。これで不味かつたら明日どうなるか分かつてるよね？」

小悪魔スマイルで聞くのは反則だ。

「毒でも盛ってやろうか……」

小声で愚痴る。

「あと、洗濯物も取り込んでね」

「それは自分の仕事だろ！」

話の流れで自分の仕事を押しつけてくる、やることが有紗に似てきたぞ。

「それくらいすればいいじゃん。あと毒なんて盛ったら怒っちゃうぞ」

聞こえていました。そういつてリビングを出て行った。

「あいつら……」

急に場が賑やかになったので頭がズキズキする、けれど夕飯を用意しなければならぬ。仕方ない、藍に元気が戻るための先行投資だと思つて大人しく従うとしよう、精一杯うまい物を作つてやる。

口では皮肉ばかり言っているが本心はやはり楽しい、僕は二人を驚かせる様な料理を作るために材料の買い出しへ出かけた。

*

テーブルの上には沢山の豪華な料理が並んでいる。

「これ……全部優ちゃんが作ったの？」

有紗は目を大きく見開いて僕に聞いてきた、その目は真剣そのもので嘘を付いたらただじゃ済まないと感じたので素直に答える。

「そうだけど、どうした？ 不満なところがあるなら作り直すけど」しばらくすると、有紗の口から涎が垂れてきた。

「はっ！ やられた！」

垂れていた涎をすすり、まじまじと僕を見つめてくる。

「毒を盛ったな！ 騙されないぞ！ 正直に言ったら許してあげよう」

「あれは冗談だから心配しなくて良い」

「で、でも……これはいくら何でも……」

確かに奮発して作った、だがこれほど驚かれるとは思ってもいなかった。

そして有紗は箸を持ち、おそろおそろ料理を口に運ぶ。

「……うまつ！ 何これ？」

初めて海外旅行に行つて見たことも聞いたこともない料理を目にし、食べたら意外と美味しかったので使い慣れていない外国語で「何の料理ですか？」と聞く日本人のような台詞。

「ただのシーフードパスタだけど」

「これもうまつ！」

「これもただのマグロのカルパッチョ」

「全部うまつ！」

今日のメニューはシーフードパスタにマグロのカルパッチョ、ポテトサラダ、デザートに買ってきたケーキ。

「いつもより少し豪華だけどそこまで驚くことは無いだろ」

僕がそう言くと、有紗は食べる手を休めて藍を見る。

「いやいやいや、今日はすごく豪華だよ」

藍は嫌な強調の仕方をする。

「見栄なんて張らなくて良いよ、普段からこんな豪華な料理食べるなら毎日来ちゃうよ？」

有紗は少しあきれた様子でこちらを見る。

「確かに豪華に作った……でも美味しい物を食べたいって言ったのは有紗だ、少しくらい見栄を張ったって良いだろ！」

有紗は僕の正直な心の叫びに耳を傾けず、またバクバクと食べていた。

「……藍……早くしないと消えるぞ」

泣きそうに話す気にもなれなかった。

「うん、そうみたいだね」

だがしかし、食事の時間がこんなに楽しいのは久しぶりだ。藍にも元気が戻っただろうか、有紗には後でもっとお礼をしなければならぬ。

「って、おい！ それは僕の分だ！」

良い気分浸っているところに、有紗の手が伸び僕のサラダを胃袋の中に隠した。

「気にするな、若者よ」

有紗は満面の笑みで口をもぐもぐさせている。

「あはは、優兄取られてる……って、私のパスタ！」

今度は藍のパスタを目にもとまらぬ早業で奪う。

「同じく気にするな、若者よ」

腹の底から笑いがあふれる。最高に楽しい夕飯だった。

食事が終わり、有紗は寝転がっている。食べ過ぎのようだが、それやあれだけ食べたら胃も大満足だろう。それに対してパスタを奪われた藍は食事が少なかったので、有紗のようにノックアウトされず、バラエティー番組を見ながら笑っている。

「うおー、優ちゃん」

苦しそうな声と顔で僕を見てうなっている。

「そろそろ帰るから送ってー」

「洗い物が終わったらでいいな？」

「うん、おっげー」

ゲップ混じりで返事をする有紗、本当に学校とは別人だ。

洗い物が片付き、あとは有紗を片付けるだけだ。

「有紗、送るぞ。藍は先に風呂にでも入ってる」

「うーす」「はい」

二人同時に返事をする、ついつい僕は笑ってしまう。

「んじゃあ、藍たんも元気だね」

「お姉ちゃんもね」

有紗がリビングを出て行く、それを追いかけるように僕もリビングを出て玄関に向かう。

外に出ると、五月の夜風が涼しくて気持ち良い。有紗も同じようだった、外に出るなりすぐに背伸びをした。

「気持ちいいね」

「ああ……」

自転車には乗らずに、ゆっくりと歩き出した。

「——本題だけど、藍たんが変わったことなかったかな？」

声がいつもと違っていた、真面目で、冷たい感じ。顔を見ると有紗の目は僕を睨むような目をしていた。

なぜだろう、素直に言えばいいのに言葉が出てこない。

「どうしたの？ 何かなかったって聞いているの」

やはり声が冷たい、有紗がこんな声を出したのは初めてじゃないだろうか。

「どうして何があつたなんて聞くんだよ？」

「質問を質問で返さないで」

即答される、間髪入れずに有紗は僕の言葉を遮る。本気の目だ、いつもの優しさは無い。

「もう一回聞くんよ、優ちゃん。藍たんが変わったことはなかった？」

「……少し」

「どんなこと？ 詳しく教えて」

やけに噛みついてくる、なぜこんな事を聞くのか知りたい。有紗

と藍の間に何があったのだ、夕飯の時は何もなかったじゃないか……。

「早く教えて」

僕を急かす。

「……苦しそうに笑ってた、あと何か探してた……」

「それは本当に藍たんなの？ 泥棒とかじゃなくて？」

あくまでも真剣なまなざしで確信を求めるように聞き直してくる。

「藍の声だった……はずだよ」

記憶は鮮明だったがついあやふやに答えてしまう。

「分かった……ごめんね、なんか恐い声出しちゃったねえ、そんなに驚かないでよちょっとしたジョークジョーク、ハハハ」

いつもの有紗に戻った、目には優しさ、声には明るさ。……何だったんだ、今のは本当の有紗だったのか？ 自分に何度も問いかけるが本当の答えは見つからない。奇妙だった、不思議だった、難解だった。

「ここで良いよ、恐いお兄さんに襲われないようにね」

「まだ有紗の家じゃな……」

少しだけ歩いただけだ、数分しか経っていないと思う。けれど邪魔者扱いするように有紗に帰れと言われる。

「いいって、早く帰ってあげなさい、藍たんが待ってるでしょ」

有紗は僕の言葉をかき消すように言い放って、自転車に乗って走っていった。

「何なんだよ……」

頭の中で色々な事が巡る。藍の昨夜の不可解な行動、有紗の不可解な発言。何だっていうんだ……。

途方に暮れても仕方がないので、家に戻ることにした。

同じ道を引き返し、すぐに家に着く。ついさっきの不可解なことに思考を巡らせながらドアに手をかける。

ドアを開け、そこには見慣れた玄関があり、見慣れた靴があり、

見慣れた靴だがあり、見慣れた置物があり、見慣れない藍の姿があった。

藍が普段決して外さない眼鏡を外していたのだ。眼鏡を外している藍はとても目つきが悪い、だから誕生日に僕が似合う眼鏡をプレゼントした。それを気に入り、それから眼鏡を外すことは無くなった。それなのに……お気に入りの眼鏡だったはずなのに……。

「……ただいま」

いつもと雰囲気が違うので少し動揺してしまい、少し声が小さくなってしまった。

「誰だアンタ？」

いつもより低い声に汚い言葉遣い。眼鏡を外しても僕の声とシルエットで人を判断する能力くらい備わっているはずなのに妙な質問をする。

「誰って……優だよ、お前の兄貴だろ……何言ってるんだよ？」

意味が分からない、自分でも何を言ってるんだろ。そんな当たり前の事を実の妹に説明している。

「ああ、コイツの兄貴か」

藍が喋った瞬間、僕は家を出てドアを閉める。訳が分からない、きっと夢でも見ているのだ、有紗も変だった。藍も変だった。これは夢なんだ。

玄関のドアに背中を合わせ、息を整える。目を閉じて気持ちを落ち着かせる。

最近色々なことがあって疲れただけ、これは現実ではない。

「きつと、玄関を開けたら藍がいる。いつもの藍がいる。絶対、絶対、絶対に……」

一息つき、玄関のドアを開け、目を開ける。

「やあ、お帰り。どうした？ 顔が真っ青だぜ」

目を開けると目の前に藍の姿をした何かがいた。

「どうした？ お帰りって言ってるだろ、返事くらいしたらどうだ？」

夢じゃない。

「……ただいま」

「ああ、良かった返事をしてくれて。流石に驚いたよ、アタシがドアを開ける寸前でいきなり開くとは思ってもいなかったよ」

夢じゃない。

「……誰だよ？」

「ん？ なんだって？」

夢じゃない。

「……お前は誰だって聞いてるんだよ」

「アタシか？ そりゃそうだなアタシしかないからな」

夢じゃない。

「早く答えるよ！」

「怒鳴るなよ、アタシは舞だ。踊りの舞と書いて舞だ」

夢じゃなかった。

全身の力が抜け、地面に膝をつくような形になる。

「誰だよ、舞って誰だよ……お前は藍だ！ 舞なんて知らない！」

脳が理解することを拒絶する。今ここでこの世界を現実だと思いたくない。

「アタシが舞、もう知ってるだろ。知らないなんて言わせない」

誰が見ても僕の目の前で仁王立ちしているのは藍だ、舞なんて誰も知らない。

「じゃあ藍はどこだよ……どこに行つたんだよ！」

「いちいち五月蠅いな。アンタの妹さんはアタシ」

「違う……違う違う……違う違う違う違う！」

「五月蠅いな……斬るぞ」

藍……いや舞と名乗る藍が僕の頬にカッターを当てる。急なことで僕は黙ってしまう……。

「やっと黙ったか、次に五月蠅くしたら斬るからな」

カッターの冷たさが、熱くなっていた僕の頭を冷やしてくれる。

それでも心臓は跳ね上がるように脈打っている。

「今度は黙り込んでどうした？」

冷静に、落ち着いて状況を判断する。

舞と名乗る藍は、僕にカッターを向けている。それと眼鏡を外しているのにも関わらずはつきりと見えているようだ。あとは眼鏡を外した目つきの悪い目が、普段の藍と少し違う様な印象を受け、声もいつもより低い。

「あはっ、やっと落ち着いたかな？」

この笑い方……昨夜と同じ。

「昨夜、藍の部屋で何か捜し物をしてなかったか？」

おそろおそろ言葉を発する。

「ああ、してたよ。このカッターを探していた、別にハサミでも何でも良いんだけどな」

昨夜の出来事は夢ではなかった。つまり紛れもない真実なのだ。

「なぜカッターを？」

どうしてそんな物をあれほど必死に見つけようとしていたのだろうか。

「そんなことアンタには関係無いだろ」

あっさりと答える事を拒否した、なぜあそこまで言えるのに理由は言えないのだろうか？

「じゃあ質問を変える」

「もういいだろう？ アタシは疲れた、何でご親切にアンタの質問に答えなければならぬ？」

話し方や表情を見ると舞は僕を殺す気が無い様に思える。そんなにしっかりとカッターを握っているわけでもないし、殺すそぶりは先ほどの一回しか見せてない。

それに殺気が全く感じない、僕と話すことを楽しんでいる様に見える。

一か八か、運が無ければ僕はきつと殺される。実の妹に殺される。

「なあ、舞……お前の後ろにいるのは誰なんだ？」

「……え？」

生きるか死ぬかのブラフから生まれるほんの僅かな一瞬。僕はすぐにカッターを持っている手を殴る。

「おい！ アンタ何すんだ！ 畜生！」

殴った反動でカッターは手を離れ外に転がる。僕はその瞬間に舞を押し倒す。

「暴れるな！」

「おい、やめろっ！」

抵抗できないようにしっかりと腕を固定し、マウントポジションを取る。

「やめろ！ 助けてくれ！」

「何が助けてくれただ！ 糞野郎！ 妹を……藍をどこにやった！」

「違うんだ、頼む、カッターを……」

助けを求めても誰が力を弱めるか、藍の身体をおかしくしたんだ。

「黙れ！ 藍は無事か！」

「……」

——様子がおかしい、熱くなりすぎて気付かなかった。

「早く、カッターを……頼む」

「おい！ どうなってるんだ」

さっきとは違ってかわって弱そうな声、顔はどんどん顔が青ざめていつている。

「おい……カッターがどうした？」

冗談を言っているようには思えない、少しずつ心配になってきた。
「返してくれ……」

じわじわと首もとから蕁麻疹が現れ、声を発することも苦しそうだ。

舞をマウントポジションから解放し、すぐに外に落ちているカッターを拾う。

「あはっ、カッター、カッターだ。刃物だ、刃物だ、刃物、刃物刃

物刃物刃物刃……」

拾い上げたカッターを見た瞬間、壊れたように小声で刃物と繰り返しながらはいずって近寄ってくる。近寄ってくるとき舞の目が輝いていた。いや、実際に光っている訳では無い、光っているように見えるだけ、だがそれが僕を不思議な気持ちにさせる。

「どうしてこんなに身体が熱い……」

全身が長距離を走ったような熱さ、そして心臓は跳ね上がるように脈打っている。

舞はやっとカッターに手が届き、きつく握りしめるとそのまま動かなくなった。

——僕の荒い息づかいだけが夜に響く、舞は微動だにしない。まるで屍のように……

「……し、死んだのか？ 藍はどうなるんだ、おい！」

身体を揺さぶり安否を確認する。

「うつ……」

反応が有る、死んではない。

「おい、返事をしてくれ」

もう起きてこないそぶりを見せられたので心配だった。

「……な、なんだよ……少し黙ってる……」

気が付いたと思えばいきなりこの台詞、けれど素直に黙り復活の時を待った。その間に落ち着こうと深呼吸をして時間をつぶす。

——数分後、舞と名乗る藍がやっと起きあがり、僕の呼吸も整った。

「さっきのは何だっ……」

カッターが僕の喉に当てられた。

「アタシは刃物が無いとさっきのようになる。今後私から刃物を取り上げてみる！ 命は無いからな」

そういつてカッターを振り下ろす……僕の服が斬れた。

「こんな風になりたくないだろ？」

「……ああ」

「話は中です。いつまでも外で騒ぐ訳にはいかん」

すっと立ち上がり、靴を脱ぎ、リビングに入ってしまった。僕も後を追うようにリビングへ向かった。

「とりあえず着替えてきな、格好悪いぜ」

まずリビングに入るなりそんなことを言われた、汗をかいていたから命令に従った。

バスルームに向かい、綺麗に斬れている服を脱ぎ、洗濯機の上にたたまれているシャツに着替えた。

ふと、鏡を見る。僕の顔はやつれ、疲れ切っていて、魂が抜けたような顔。自分でも見るのが嫌になったのでリビングすぐ戻ることにした。

リビングに入ると、舞がテレビを見ていた。深夜のニュース番組か何かだろう、海外で起きたテロの特集がやっていた。

「座りな」

テーブルに向き合うように座る。

舞は殺す気が無いようだが、僕の心配は消え去らない、注意を怠ってはダメだと自分に言い聞かせる。

「とりあえず、状況が全く把握出来ていないようだな」

僕はこくりとうなずく、もう喋る気力が残っていない。

「今アタシはアンタの妹さんの身体を借りている、そこまでは理解できるか？」

「そうみたいだな」

明らかに藍ではない、もうそこは認めるしかないだろう。

「藍は無事なのか？」

心配はそこだ、藍の身体に異変が無いのか、そもそも藍はどうなっているのか。

「問題ない、アタシの意志でどうにでもなる。アタシが消えれば妹

さんになるし、アタシが出てくればアタシになる」

安心したせいか、全身の力が抜ける。

「良かった……」

「良かったな」

少し笑みがこぼれる、ぶっきらぼうなしゃべり方だが、どこことなく優しさが見えた気がした。

「いつまでもアンタって呼ぶのは好きじゃない」

舞は急にそんなことを言ってきた、そういえば僕の名前を言っていないかった。

「僕は優」

「優……優か。もしかして名字は月森か？」

「そうだけど、どうして？」

名字を言い当てられるなんて思ってもいなかったので驚いた。

「ということは……桜の息子が、どうりでな。あはっ、これは面白くなってきたな」

独特な笑い方をする、何となく目つきの悪い目が輝いているように見えた。その目は吸い込まれるような不思議な感覚を受ける。

「そうか、そうか、よろしく頼むよ優」

「何で母親の名前を知ってるんだよ？」

舞は何も無かったように挨拶をするが、僕はなぜ名字を言い当てられることができたのか、母親は有名人ではないし、何かすごいことをした人でもないのになぜ？

「いやー、こっちでは有名な人だよ。懐かしいねえ、今はどうしてるんだ？」

「死んだよ」

「あはっ、死んだか、失敗でもしたかな。それより、実の母親が死んだのにあっさりしてるな」

「別にどうでもいいだろ」

他人から見ても両親の死という体験をしたのに、悲しんでいないような印象を植え付けるとは思っていなかった。

それよりも失敗？ 失敗とは何だ、飛行機事故で失敗なんて操縦士じゃないはずなのに……。

「失敗つてのは何だ？ 母親との関係も教えてくれ、訳が分からない」

素直に聞く、僕の中で知りたいという意識が強くなってきたのだろ。

「気にするな、優が気にするような事じゃない。それより死因は何だ？」

質問を質問で返される、知りたいことを教えてもらえないということは少し腹が立つ。

「飛行機事故だよ、ニュースでも大きく取り上げられた。そんなことどうでも良いだろ！ 教えてくれ！」

早く情報を得たいがあまり、話し方が喧嘩腰になる。

「どうでも良くないな。飛行機事故か、それじゃあ桜は何も出来ないわけだ。あはっ、これもまた運命だ」

「一人で笑ってるなよ！」

つい怒鳴ってしまう、もうこれ以上混乱したくない。正体不明の舞、母親のことを知っていて、藍の身体に居座っている。そもそも藍の中にいるということもおかしい。現実を見ると、そこには非現実が広がる。

「五月蠅くするなって言ってるだろ、君も大人だ、もう少し聞き分けを良くした方がいいぞ」

ちらりとカッターを見せつけてくる、ここまで来ると完全に舞のペースだ。どうしようも無く僕は黙り込んでしまう。テレビの音だけが静かな空間に響いていた。

『一週間前の飛行機事故のニュースです。死者八十名の大惨事、奇跡的に生き残った四名の意識が戻りました。』

そんなときにあのニュースの内容が流れた。

「これだ！ このニュース」

「五月蠅い、静かにしろ」

舞はカッターをちらつかせた。

『専門家によると、席が後ろの方で衝撃が少なく、墜落時に頭を抱えていたため、重傷でしたが命に別状が無かったようです。ただいま病院で治療を受けている生き残った四名です。佐藤光さん、佐藤美輝さん、佐藤光輝君、秋月栄凜さん。最後に無くなった方々、ご冥福をお祈り致します』

「あはっ！ これは傑作だ！」

ニュースが終わり、舞は突然笑い出した。意味が分からない奇怪な行動、もう嫌だった。

「優！ これはすごいぞ」

目つきの悪い目を光らせながら話しかけてくる。

「何が何だっけ言うんだよ！」

もう僕の精神状態はピークだった、舞の行動一つ一つが気に障るくらい落ち着きがなかった。

「怒るんじゃないよ、飛行機事故に犯人がいるんだよ。あはっ」

「犯人……」

自分の耳を疑う、興奮状態だったので状況がよくつかめていないけれど、この『事故』に犯人がいる？

「そうさ！ 犯人だ！ 栄凜、秋月栄凜。笑わせてくれるぜ。あはっ」

この『事件』に犯人がいる？

「——本当……なのか？」

「ああ、間違いない。秋月栄凜とは殺し合ったことがある、間違いない」

「この、秋月栄凜ってのが……犯人……」

死んだのでは無く、殺された。栄凜という犯人に殺された。舞は殺し合ったことがあると言っていた、舞は母親のことを知っていた、舞は母親が失敗したと言っていた。心のどこかに苛立ちを覚える。

「舞、お前はいたい何者なんだ？」

「アタシは舞、舞でしかない」

上手く誤魔化されているが、舞には何かあると僕は確信する。

「違う、僕の言っていることはなぜ母親を知ってるとか、なぜ米凜が犯人だって分かんとかその類の質問だ！」

「なんてことない、知っているから知っているだけだ」

薄気味悪い笑みを浮かべながら返答をする。ひねくれ者だとは分かっていたがここまで屈折しているとだんだんと怒りが沸き上がってくる。

「そうだ……服だ」

舞はぱつと僕を見つめてくる、反応があつた。急いでバスルームへ行き、先ほど脱いだ服を拾う。

「やっぱり……そうだ」

服を手にしたままりビングに戻り、さっきと同じく笑っている舞の向かいに座り、服をテーブルの上に置いた。

「なあ、舞……」

「改まってどうした優？」

笑いをこらえながらの返答、両腕を腹に抱えて必死に笑いをこらえている。

「どうして……服が斬れてるんだ？」

「あはっ！」

ついに笑いがこぼれる。

「だっておかしい、カッターだぞ？ あんなちっぽけな刃物でこんなにスパツと斬れる訳がない！」

そうだ、おかしい……文字通り綺麗に斬れている。

舞はチキチキとカッターの刃を出す。

「あはっ！ 気付くのが遅い、桜の子供とは思えないな。さて、よく見てる答えを見せてやるよ」

木のテーブルに刃の部分に向け、目が輝き出す。

「な、なんだ……」

刃を突き刺して、それを引く。

に来てね」

僕がうなずくと、藍は部屋から出て行った。

いつも通り壁に掛かっている制服に袖を通し、いつもの学校に行く準備をする。寝坊をしたので準備を早めに終わらせ、リビングに向かう。

リビングに入ると藍が何か困っている様子だった。

「このテーブルどこに持って行ったの？」

いつも有るはずのテーブルが消えていた。

「早く持ってきてよ？」

昨日……そうだ舞じゃない、今は藍なんだ。眼鏡をかけていて、声も明るいいつもの藍なんだ。

「あ、ああ」

とっさに出た返事は間の抜けたものだ。藍と会ったのは数時間ぶりなのにもうずっと会っていない様な気分、見知らぬ土地から我が家に戻ってきた感覚、疲れ切った身体がやっと休まる様な感覚だ。

「面倒だから隣の和室に持って行くよ？ 早くテーブル戻してね」

「頼む、そうしてくれ」

舞がどこにテーブルを片付けたか分からないので藍の言葉はとても助かった。

それより昨日のことだ、あの後どうなったんだ……僕が気を失って、朝起きたら僕の部屋に寝ていた、テーブルも何処かに消えていた。分からないことばかり、もっと舞と話さなくてはならない。

だが、どうしたら舞は現れるのか。僕から呼び出すことは出来ないのだろうか。出来たとしても藍に怪しく思われてしまう。

「早く来てよー」

「ごめんな」

和室から藍が戻ってきた、そんなに考え事をしていたのか。

「どうしたの？ 何か変だよ、それに時間考えないと遅刻だよ」

「大丈夫だ。ほら、食うぞ」

とりあえず朝飯を食べるために和室へ向かう。

和室は廊下を挟んでリビングと向かい合っている。いつもは客人をもてなす場所として使われているが、たまに和室で食べることもあった。

和室はそれなりに広く、日本らしいちゃぶ台があり、本物の兜、鎧、刀が二本綺麗に飾られている。夜に入ると不気味で、藍が子供の頃は使われなかった。今では泣くことも無くなったので問題なく使われている。

「和室で食べるのもなかなか良いじゃないか。明日からもここで食べようぜ」

「それも良いかもね」

藍は笑いながら同意してくれる。

今日の朝飯はトーストとハムエッグ、それと牛乳。我が家の定番メニューだ。

昨日疲れたからだろうか、食事が進む。すぐに食べ終えてしまい、結局はいつもとほぼ同じ時刻。

「今日は早いね、どうしたの？」

「藍が作ったから美味かったんだ」

藍が牛乳を吹いた。

「うおっ！」

間一髪で避ける。

「げほっ……恥ずかしい事言わないでよ！ 怒るよ！」

「いや、怒ってるよな？」

「怒ってなんか無いよ！」

どう見ても怒りながらテーブルを拭き始める。

「まあ学校行くから、今日も休むんだろ？」

「あ、ごめんね」

昨日と同じく、身だしなみを整え家を出て、自転車を走らせる。

すぐに学校へ着く、有紗には何となく会いたくなかったが、教室に行けばいつも通り女子と喋っているだろう。嫌な気分だったが教室に入る。

「おは優ちゃん」

「おはよーさん」

いつも通りの学校キャラの有紗。

「昨日は激しかった、帰ってからもう立てなくなっただくらい」

急に聞き取りやすい声でとてもないことを言い出した。

「ちょ、ちよつとまで！ お前に何かしたみたいない方止めろよ」
周りの目が少々痛い、言いたい放題いやがる。

「何のこと？ 私は食べ過ぎて胃への負担が激しくて、帰ったらお腹いっぱいですぐ寝ちゃったって事だよ」

今度は異様に男子の目が痛い、有紗の本性を知れば絶対こんな事にならないのに。

「本当に昨日はご馳走様でしたー」

今度はいつもの有紗口調でさらっと言う。

「藍と遊んでくれたお礼だと思ってくれ」

「それとは別の話じゃなかったの？」

コイツ……酷すぎる。

「冗談だって、そんな恐い顔しないでよ」

あの目は間違いなく冗談じゃ無かった。

「まあ、昨日ありがとっ」

素直に礼を言ってくるなんて珍しい。

「こちらこそ感謝してるよ」

僕が言葉を返すと、有紗はクラスメイトの女子の所へ戻っていった。

意外なことに昨日の出来事については聞かれなかった。昨日の有紗は何だったのだろう、今日の有紗はいつも通りの有紗だ。

むしろ恐怖を感じる、有紗は何か知っている様な気がする。舞の

ことは言わない方が良さそうだが、僕は嘘を突き通せるか……あの目で睨まれたらまた恐怖におびえ何も出来なくなるかもしれない。考えても答えは全く見つからない、まだよく分からない箇所は舞に聞く以外方法は無い。

チャイムの音が鳴り響く、一限の授業の開始のチャイムだ。とりあえずは勉学に勤しもう、こんな訳の分からないことを考えていたくない。

一限が始める、古典の授業。先生からはき出されるお経みたいな台詞は、僕に眠気を運んでくる。

大きなあくびを一つ。ふと、有紗の方を見ると目があつて微笑を浮かべられた。

その後もあくびが止まらず、一限が終わったとき、眠気はピークだった。

「眠たそうだねえ、優ちゃん」

「古典は面白いが、先生が面白くない」

「それには激しく同意」

有紗は笑いながら言った。

「そんなに眠いなんて珍しいね」

「そうか？」

「いつもはもつとしっかりしてるじゃよ、疲れてるんじゃない？」

「さあな、昨日は有紗が来たから疲れたんだろ」

「酷いなあ、今日も行つて疲れさせてあげようか」

出た出た、小悪魔スマイル。

「ちゃんと疲れは取るようにしようね、身が持たなくなるよ」

僕がうなずくと有紗は自分の席に戻っていった。何気ない会話が僕の緊張をほどいてくれた、有紗はこんなに優しいのに、昨日はどうしたのだろう。

昨日の出来事は幻だったのだろうか。藍に何かあったか聞いただけだし、口調が強くなったのも僕はぐだぐだしていたからかもしれ

ない。

そんなことを考えてる間にまたチャイムが鳴り響く。次は数学だ、考えただけで眠気がおそってくる。

特に有紗との会話もなく放課後を迎える。有紗はすでに下校、僕はクラスのみんなとくだらない話をしていた。

「今日は日本対ブラジルの試合だぜ」

「超楽しみだよな！」

「どっちが勝つか？ やっぱりブラジルだよな」

「日本だつてやるときはやるぜ」

他愛もない会話に僕は相づちを打っている、色々なことがあったのでくだらない会話は、何となくだが癒される。

「そういえばお前最近疲れてないか？」

山村が僕に聞いてくる。

「何でまた急にそんなことを？」

「いや、目の下に隈ができてから、お前が隈を作るなんて珍しいじゃんか。テスト前もいつも綺麗な顔してるくせに」

僕に隈が出来てる？

「本当か！？」

「ああ、でもそんなに驚く事じゃないだろ」

つい声を大きくしてしまう。有紗ともこの顔で喋っていた、隈を見られた。

「睡眠不足には注意しろよ。確かにご両親の事は残念だと思うが、自分のことも大切にしろよ」

「あ、ああ」

隈を見られた、つまり寝不足だと気付かれる。

——だから、何も聞いてこなかった。

僕の中で点と線がつながった、有紗は何も言わなかった、それは

僕を見たら一目瞭然だった訳だ。

つまり逆を言うと隈についてふれなかった有紗は、何か隠していたということになる。

「おい！ 聞いているか？」

「ああ……ごめん」

「しつかりしろよ、今日はゆっくり休んだ方がいいぜ」

僕は優しい友達を持ったな、山村の言葉が心にしみる。

「ごめん、今日はもう帰るわ」

「お大事に」

なんだか藍に危険が迫ってる、もしくは有紗が何かしたような、そんな気がしたので僕は家に向かって急いだ。

*

夕焼けがまぶしい時間に家に到着。

すぐに玄関を開け中に入り、急いでリビングを見る。

「いない」

和室を見る。

「いない！」

二階へ上がる、まず僕の部屋。

「何でいない！」

藍の部屋の前、鼓動が早い、ドアをふれる手も汗で滑りそうだ。

勢いよくドアを開ける。

「いない……」

部屋の中は誰もいない、何も変わってない。藍はいなかった。

どこだ、どこに行った……静まりかえった部屋の中で僕の荒い呼吸音だけが響く。だからと冷や汗が滝のように流れ出す、服には湿り気まで感じる。

「……畜生」

ふと嫌な考えがよぎる。藍がいないのは有紗のせいなのか？ い

や、有紗がやったという証拠が無いし、そもそも有紗が怪しいかどうかも定かではない。

こんな悪い考えをするなんて……少し自己嫌悪に陥る。でも、いたい何なんだ。最悪有紗が消したとしても藍はどこへ消えた、どこにいる。

冷静さを取り戻した頃、微かだがガタンという物音がした。

「まさか、バスルーム……」

そうだった、バスルームを調べていない。もしやと思い僕はバスルームに向かう。

折角取り戻した冷静さも木っ端微塵に吹き飛び、また焦りで心が満たされていく。

階段を駆け下り、バスルームの前に到着。一気にドアを開ける。

「藍！」

「おっ!？」

藍がいた。眼鏡をかけていない目つきの悪い時の藍だ。

「良かった……本当に良かった」

捜し物が見つかり、ほっと一息ついた。

「お、おい……優？　いくら妹さんの身体でも、見つめられると恥ずかしいのだが」

優？　藍の口調が違う。つまり、藍では無い。

「ん……舞なのか？」

「ああ、その通りだ。それより、そんなにアタシの裸が見たいのか？」

そうだった……よく見ると舞は全裸、風呂上がりだろう。

「——ごめん！」

とりあえず謝って、バスルームのドアを急いで閉めた。

でも良かった、藍の姿を確認出来た。文字通り全身隈無く。

けどどうして舞が出てきていたのだろう。昨日もそうだ、勝手に現れて、勝手に消えていた。

まだまだ謎が多い、昨日は混乱状態だったが、今の僕は冷静さを取り戻している。今日は舞からあらゆる事を聞き出さなければ。

「リビングで待ってるから」

「おう」

一枚のドア越しに舞の返事を聞き、僕はリビングへ移動する。リビングはテーブルが無くなったからなのか、広く感じる。いつもテーブルのあった場所にぺたりと座り込む。

数分後、舞はやってきた。

「それ……」

「借りたぞ」

僕の普段着を一枚だけ着て、リビングにやってきた。

「妹さんの服はアタシに合わないのだ、今度買いに行くぞ」

僕でも少し大きい服を、妹の身体で着ているのだからぶかぶかだ。でも、そんな事は舞の持っている刀に比べたらちつぽけなものだ。「服じゃない、刀だ。何でそれを持ってるんだよ」

「刃物が無いと駄目になるんだ、知っているだろ」

そうだ、舞は刃物を持っていないとあの時みたいになってしまうのだ。だからと言って和室の刀は模造刀じゃなく、本物の刀だ。一本は打刀、もう一本は大太刀、舞は打刀を持っている。

「危ないだろ、もっと小さい……それこそ昨日のカッターじゃ駄目なのか？」

「あはっ。この刀の素晴らしさを知ったら、手放す事なんて出来ないよ」

舞はとりつかれた様に笑う。

「そんなにすごい刀なのか？」

僕の父親が集めた一品だ、それなりに値段が張ると思うが、実際使ってみる事と値段は別のはずだ。

「この綺麗な刀身、手になじむ柄、これが綺麗に納まる鞘。どれをとっても最高だ」

物理的な証拠はいっさい無く、自らの感覚だけで言っているようだ。

刃を抜き差ししている時の舞の目は輝いて見える。どこもない気持ち悪さが僕を襲う。

「私の刀になるために作られた様にも思えてくる。あはっ」

舞の機嫌が良さそうなので、質問したいことを全部しよう。

「それより、ここにあったテーブルはどうしたんだ？」

「綺麗に斬って、燃えるゴミにした」

斬って……という言葉がどこか引かかる。

「すまないと思っている、弁償は出来ないから心から謝る」

「いいよ、頭をあげてくれ。それより昨日の事を教えてくれ」

舞は深々と下げていた頭を上げ、一度うなずく動作をして。

「昨日は大変だった、もう気絶なんてするなよ」

こちらを真剣な表情で見る。

「そうか、気絶してたのか……」

「その後は優を部屋まで持って行き、テーブルの処理をして、この刀を見つけた訳だ」

「それだけか？」

「これだけだな」

舞の話し方が少し適当に聞こえた。だが、他に何かあったとしてもたいした事では無いのだろう。ならばそこまで詳しく問いつめるつもりは無い。

「舞はさっきから斬るとか言ってるし、昨日はテーブルが真つ二つになった。アレはいったい何なんだ？」

これが一番の謎、不可解、不思議。カッターの様な脆い刃物である事をするなんて非科学的過ぎる。

「アレか、アレはアタシの能力さ」

「……能力？」

舞の言葉には驚かなくなってきたが、言っていることを理解するのはまだまだ時間がかかりそうだ。

「そうだな、アタシに斬れないモノは無いんだよ。昨日見せただろ、アレは能力の力なんだ」

「何か不思議な力を持っていると、つまりそういうことか……」

「昨日と違って物わかりが良いな。学習能力の有る人間は好きだ」
信じられる訳がない、だが信じるための証拠は有る。つまり信じざるを得ない。

「能力についてもう少し詳しく教えてくれないか？」

さらなる信憑性を求めるために聞いたつもりだったが、実際は少し興味があつたからでもある。

「詳しくと言われてもな……どんな事が知りたい？」

「そうだな……」

能力なんて言葉を聞いたのも初めてだというのに、いきなり難易度の高い質問返しをされたものだ。

「えっと、その何だ？」

質問がうまくでてこない。能力について皆無なんだ、まだ舞が斬れないモノが無いということしか情報がない。

「その能力ってのは、どうやって使うんだ？」

「アタシの場合は簡単さ、集中して刀に力を加え、一気に振り斬る。それだけだ」

「場合って事は……能力は人それぞれ違うのか？」

「アタシの能力の様に簡単な条件の能力もあれば、能力を使う条件が難しいヤツもいる。能力者はそれぞれ発動条件が違って、その能力も見ただけではカモフラージュされていたりすると、全くどんな能力なのか分からなかったりもするぞ」

「つまり、舞の場合は刃物が条件、カモフラージュには適していないけど強いってことか」

舞は嬉しそうにうなずいた。

「昨日から大きな進歩だな、アタシは嬉しいよ」

今でも記憶が曖昧だが、昨日はとても錯乱状態だったのだろう。

「優の親御さんが殺された件についてだが、栄凜も能力使いだ」

両親を飛行機事故に見せかけ、殺した犯人。栄凜も能力使いなのか……

「栄凜は遠距離から攻撃をしてくるから困った、私の攻撃範囲は刀の長さだから圧倒的に不利だった」

舞の昔話が始まった。

「大変だったよ、すべてが弾丸になる。そんな能力だった」
「弾丸？」

「銃の弾丸だと思ってくれ、栄凜は一般人を輪ゴムで殺せる」

「……ゴム鉄砲？」

「その通り、命中力が無いのが残念だな」

そこは常識の無い世界、弾丸にする能力なんて不思議では無いのだろう。

でも分からない事がある、どうして栄凜は飛行機事故に巻き込まれたのだろう。弾丸の能力で地上から打ち落とせば楽なのに。

「栄凜は少し変なヤツでな、端から見ている分には愉快なヤツだ」

舞の昔話は止まらない。面倒だから聞き流すことにした。

——それから舞の戦いの話が数十分にわたって話された。

「……アレは凄かった」

少し疲れた表情を見せた。僕はこんな昔話を聞いているより、大事なことを聞かなくてはならないのだ。

「舞……」

「改まってどうした？」

舞は二重人格なのか憑依しているのか分からないが、栄凜の事を知っていた。多分昔の記憶が有るのだろう。ということは、有紗について知っていたら、有紗の異常な行動の意味も分かる。

「能力について詳しいよな？」

「ああ、自分は詳しいと思っている。能力も能力者もどちらも知識は有る」

この質問は本来なら聞くべきでは無い、とても失礼な行為だ。だ

が、僕自身や藍を守るためなんだと、自分に言い聞かせる。

「有紗って人を知っているか？」

「……有紗？」

胸の前で腕を交差させて悩んでいる。

「記憶に無い」

「能力使いかもしれない人なんだが」

「アタシは知らないな」

舞の口から聞いたかった言葉を聞いた。有紗は能力使いじゃない、舞がどれだけ詳しいのか分からないが大丈夫だろう。舞を信じ、有紗も信じられる。

有紗の問題が無くなった今、残りの問題は栄凜だ。

この事件の犯人、両親を殺した犯人。

「おい」

舞が強めの声を発する。

「何だよ」

少し驚いたので、返事に少し驚きが混ざるような形になってしまった。

「栄凜の件なんだが」

舞も同じ事を考えていた様だ。

「殺しに行かないか？」

「……え」

栄凜を殺す、僕に取っては復讐。

「栄凜は病院にいるんだろ？　なら簡単だ、栄凜の病室に入っすぐに殺せばいい。弾丸も受けない」

「そんな安直なものなのか？」

「そんなものだ、栄凜だって常時能力を使える状況にしていけないだろう。それに怪我をしている、アタシには勝ち目しかない」

勝ち目しかない、そんな事を言われても僕は復讐なんて考えた事も無かった。確かに少しは恨んでいる、両親が死んだのでは無く、殺された事には腹が立った。

「迷っているのか？」

僕はうなづく。

「ならアタシが勝手に殺す」

「そんな！」

つい声を大きくしてしまふ。

「勝手に殺すのだから、優には関係無いぞ」

「違う、殺すことが駄目なんだ。法的措置を執ることだって出来るはずだ」

「アタシには殺すことしかできない、今までもずっとそうだった。勿論、これからもそうだ」

舞には常識という言葉は無い、そんな事知っていた。

「復讐すれば良いじゃないか。実の両親が殺された、殺し返す理由が有るじゃないか」

「殺し返す事が良いことじゃない！」

舞の面倒くさそうな声に対して、僕の言葉はとても大きい声だった。

「能力者だ、人を沢山殺している。殺しても問題ない、能力者の運命だ」

「いくら栄凛が能力者でも、死んだら悲しいものなんだよ！」

「優の母親だって、能力者を殺していた。殺されて当然の人間だった。能力を使う者のサイクルなんだよ」

「そんな母親だったかもしれないが、藍は泣いた！ 苦しそうに泣いた！」

「あんなヤツを悲しむ様なヤツはいないね！」

ついに舞も喧嘩腰。初めてあつたときと似ている。

「そんなのは舞の勝手な考えだろ！」

「そうだ、その通りだ！ だから何が悪いって言うんだ？」

「栄凛にも親族がいるはずだ！ 誰一人として悲しまない訳が無い！」

「アタシは誰にも泣かれなかった！ 殺したい理由はこれだ」

「誰にも泣いてもらえなかったって……」

「少し考えれば分かると思うが、こうして優の妹さんの身体を借りているわけだ。つまりアタシの身体はもうこの世に無い、死んだ身だ。もう本当の姿なんて覚えてもいない、ただ本当の姿だったときの記憶はトラウマとして残されている。優は正論を言ったかもしれない、ただアタシにとってその言葉は辛い言葉なんだ」

僕は知らない間に舞に悲しい思いをさせていたのだ。

「どっちにしてもアタシは殺すよ、殺すことによってアタシの心は満たされる。そしてこれはアタシ自信の両親に対する喧嘩だ」

舞は喧嘩と言っているが、これこそ復讐なのだろう。

「悲しかったのか？」

「別にそんなこと無い」

舞の言葉には重みがある。怒りや悲しみが混ざった言葉。それなのに僕は……。

「ごめん……」

「優が謝るような事じゃない」

僕は自分自身のことしか考えていなかった、栄凜を殺すか殺さないか、殺したら悲しむ、殺さなかったら悲しまない。そう思っていた。

だが違う、舞は殺したら悲しまない、殺さなかったら悲しむ。逆なのだ。

「まあいいさ、アタシは妹さんの身体を借りてる。優の言うとおりにしよう」

「あ……」

「なんだ？」

言おうか迷った、どっちにしても悲しい思いをする人がいる。つまり僕が言っていた事は、どちらかを選ばないと矛盾する。ならば、両親を殺した栄凜が死ねばいい。

「やっぱり……栄凜を……」

「聞こえないだろう、はっきり言え」

まだ躊躇ってしまふ。でも、言わなければ舞が傷つく。

「――栄凛を……殺そう」

「優……」

僕の言っていることが難解なのか、変な顔をしながら僕をまじまじと見つめてくる。

「さっきあれだけ否定していたのに、何で今頃心変わりしたんだ？」

「舞の悲しむ顔が見たくないんだ」

もう誰も悲しんで欲しくなかった、それが僕の願いだった。

「……あはっ、あはっ！　最高に嬉しいよ、それはプロポーズか何かかな？」

気味の悪い高笑いを響かせながら、なぜか激しく勘違いされた様だ。

でも、いつもの舞だ。これで良い、これで良いんだ。

「優の許可も得たわけだ。心おきなく斬らせてもらうよ」

「ああ、それで舞の悲しむ顔を見なくて良いなら人間一人の命なんて安いさ」

「優は面白いヤツだな、悲しむのは嫌で死ぬのは良いのか。あはっ、流石桜の息子だ」

「そんなに母親に似ているのか？」

近所の人々にも一度も言われたことがない、僕はどちらかという
と父親似だ。

「性格はそっくりだ。そしてその瞳も、眩しいねえ」

どうやら母親の性格はひねくれていたらしい。その息子の僕が
ひねくれない訳が無い様な言い様だった。

「もう遅い、寝るか」

舞が突然切り出す、外を見るともう暗い。時計はすでに九時半を
回っていた。

「そんなに早く寝るのか？」

「刀の素振りを三千回した、優と違ってアタシはもうフラフラだよ」

「三千回！？」

「妹さんの身体はとても貧弱だからな、刀を振るといことはとても力があるんだ」

確かに妹は運動は出来るが力はない。リレーなどでは早いほうだと聞いていたが、重労働をしている姿を見ることは皆無だ。

「汗をかいてシャワーを浴びて、風呂場を出れば覗かれた。妹さんにもそんなことするのか？」

「するわけ無いだろ」

何を馬鹿な事を抜かしているんだ、またバスルームで見た時の記憶が戻る。

「赤くなつて……」

「そんなことは無い」

無理矢理舞の台詞をかき消す。

「はいはい、アタシの身体……じゃなくて、妹さんの身体に欲情したんだろ？ 健全な男の子の反応だよ」

「そんな満面の笑みで言われても屈しないぞ、僕は妹なんぞに欲情しない、それが健全な兄の反応だ」

欲情なんてするものか、舞はものの見方を正す必要がある、絶対に。

「——それより何も食べてないだろ、それだけ疲れてるんだ、何か作るよ」

少しの間が開いたので、僕も空腹だったことから舞に夕食を作ることにした。

「そうだな、食べてから寝ることにするよ」

本当は消化してから寝た方が良いのだが、言ってもどうせ聞かないだろうからとどめておく。

僕はキッチンに向かい、冷蔵庫を開けて中身を確認する。

「簡単な物しか作れないな」

材料から見ると、カレーか肉じゃがが出来そうだ。

「カレーと肉じゃが、どっちが良い？」

「カレー」

即答だった。

「カレー好きなのか？」

舞は首を大きく縦に振った、意外と子供だ。

僕は調理に取りかかる。といつても、材料を切つて、炒めて、煮込むだけ。舞はカレーが好きなのだから多めに作ろう。

暇な時間は思考に入り浸る。舞は栄凛を確実に殺せると言っているが問題点はいくつもある。まず栄凛の場所、入院しているということは知っているが場所の特定は難しい。そして場所が特定出来たとしても、栄凛を殺すためにあの刀が必要となる、病院まで持つて行く事は困難だ。せめてこの二つの問題を解決しないと栄凛は殺せない。

そんなことを思考している間に、カレーは後十分もかからず出来てしまう。

「手伝つてくれ」

「おう」

舞が嬉しそうにキッチンに入ってきた。

「何をすればいい？」

「リビングにはテーブルが無いから、皿とご飯を和室に頼むよ」

「おう」

「涎出てるぞ」

あわててそれを手で拭う姿に笑みがこぼれた。そして何事も無かったように準備に取りかかる姿にも笑みがこぼれた。

カレーが完成、和室に運ぶ。和室の戸を開けると舞はちょこんと正座で待っていた。

「できたか！」

カレーを皿に置いて、舞にたっぷりと見せつける。舞は涎を垂らしたまま動かなくなる。

待てと命令されたよく訓練されている犬のようだ。

「おい！　しつかりしろ！」

「お、おう！」

カレーを皿に盛りつける。真っ白のご飯の上にカレーが盛りつけられ、見事なカレーライスの出来上がりだ。

「いただきます」

今にもががつという擬音が聞こえそうなくらいの食べ方だが、行儀は良い。正座、スプーンの持ちかた、どこをどう見てもジャンクフードのカレーを食べるようなテーブルマナーでは無い。

「おかわり！」

「おかわりはご自由にどうぞ」

素早い動作で二杯目を盛りつける。そして食べる。

「栄凛の事なんだけど、いつ殺すんだ？」

「明日だ」

「明日！？」

舞の自分勝手にはついて行けない。

「文句があるか？」

「無いけど……」

文句は無いが、問題はある。

「大体、栄凛が入院している場所は分かるのか？」

「優が学校に行つてるときにニュースで見た。ここから近いぞ、良かったな」

何でそんな重要なことを僕に言わないのだろうか。

「じゃあ刀はどうやって持って行く、あんな目立つ物を持ち歩くのは日本の法律上無理がある」

「優の身長があれば打刀くらいは隠せる、もう一本は無理だがな」

「身長を使う？」

「打刀は大体メートル弱、優の身長なら可能。背中に入れるんだよ」

確かにあれくらいだったら僕の背中に貼り付けておけば問題無いかもしれない。

「でも、不自然だ。絶対にばれる」

「やってみれば分かるさ、ちょうど良いんだよ。あはっ
そういつて持っていた刀を僕の背中に合わせてみる。

「だろ」

舞の言うとおりだった、綺麗に背中に収まった。

「これで問題は無くなっただろ」

まだ問題はある。藍と舞、同じ身体を共有している、肝心なときに舞がいなければどうにもならない。

「もし、舞が現れなかったら……いつも通りの藍だったらどうするんだ？」

「つまり、アタシが妹さんの身体を乗っ取れなかったらどうするかということか」

僕はうなずく。

「大丈夫、心配はいらない。眼鏡を外していれば、アタシは出てこれられる」

「だから舞のときはいつも眼鏡を外して……」

「そうだよ、妹さんは眼鏡に強い思い入れがあるようだ。普段は眼鏡を絶対に外そうとしない。何かあったのか？」

眼鏡か、僕が買った眼鏡がそんなに大事だったのか。

「特に何も無いさ」

「そうか、まあそんな事は関係無いさ。眼鏡を外せばアタシが出てこられる、眼鏡をかければ出てこれないってことだ」

これで心配な点は無くなった、栄凜を殺すための準備が整った。

それから舞は多めに作ったカレーを完食、明日の準備をしろと言
って寝てしまった。

準備なんて何もいらない、ただ舞に任せていればいい。だから、
食事の後片付けをして、風呂などをすませてから、自室のベッドに
倒れ込む。

明日は栄凜との戦い……そのことを考えると鼓動が高鳴り、目が

冴える。両親を殺した犯人、殺した理由などを少し聞いてみたい。母親は過去に何をしていたのか、なぜ殺される様なことになったのか。

明日になるのが楽しみな面もあれば、来なければいいと思う面もある。複雑な心境、逃げ出したい気分だった。

僕は逃げられない明日へ向かって眠りについた。

第二章（後書き）

長文ですがここまで読んで頂きありがとうございます。
評価や感想を頂けると嬉しいです。

第三章

ここ最近、ずっと良い朝を迎えることが出来ていなかった、それは現在進行中のようだ。

いつものように気持ちいい朝日が僕の身体に活力を与え、小鳥のさえずりが今が朝だということを教えてくれる。だが、気分は混沌……不安が拭いきれなかった。

今日は制服には袖を通さず、私服を着る。どんな出来事があるかわからないけど動きやすい方が良いと思い、着慣れた服を選ぶ。

着替えが終わり、自室を出て、藍の部屋に向かう。ドアを二度ノックする。

「朝だぞ、起きろ」

返事が無い、もう起きたのだろう。藍がいない事を確認して、急な階段を降りてリビングへ向かう。

リビングのドア開ければ、しっかり着替えたいつもの藍が笑ってテレビを見ていた。

「おはよう」

「優兄おはよー」

朝のアニメ番組を見ていた、中学生にもなってもまだ子供だな。なぜか今の僕にはそのことが微笑ましかった、つい小さな笑いがこぼれる。

「朝からにやついてどうしたの？」

「ちよつとな」

藍の隣に座り、一緒にテレビを見ることにした。舞を呼ぶためのきっかけを作るためだ、普段は眼鏡を取らないし、僕から取ろうとも思わないので不自然かもしれない。出来るだけ自然を装って眼鏡を外さなくてはならない。

「あのさ……」

「今良いところだから静かに」

「はい」

怒られてしまった。アニメ番組は後少しで終わるので大目に見よう。

そういえば、眼鏡も古くなってきた。買い換えを提案したら眼鏡を外してくれるだろうか、いや分からない。舞は眼鏡に強い思いがある様なことを言っていた。でも、方法はそれくらいしか思い浮かばなかった、ならばこれを実行するのみ。アニメ番組の終了を待つことにした。

数分後、やっとエンディングテーマが流れてきた。

「話があるんだけど……」

「次回予告がまだだから静かに」

話を切り出そうとしても出せない。

もう数分経つと次回予告が終わり、間違いなくすべてが終わった。
「それでどうしたの？」

藍の方から話しかけてきた、これは良い流れだ。

「プレゼントでもしてやろうか？」

「誕生日はまだだよ？」

食いつきが悪い。

「最近不幸な事が続いているだろ、新しくスタートするために何かきかけを作ろうと思ってるな」

「な、何か怪しいよ……」

どうもまだ食いつきが悪い。

「眼鏡も古くなってきたじゃないか、ちょっと見せてくれよ」

「えー、嫌だよー。眼鏡取ると目つき悪くなるんだもん」

実力行使しか無いのか……

「仕方無いなあ、新しい眼鏡買ってよね」

半ば諦めていたときに良い返事が聞けた。藍は眼鏡に手をかけて、ゆっくりと外す。

「はい、優兄。でも眼鏡をどうするの？」

藍は僕に眼鏡を手渡し、数秒経つと気を失ってしまった。

「こんなに早く気を失うのか」

ふらふらと気絶するのでは無く、一瞬で身体力が抜ける様に気絶してしまった。

「ん……優か」

そしてすぐに舞が現れる。

「おはよう」

「おう」

舞独特の挨拶、これから栄凜を殺そうというのにいつもと変わらない。むしろ嬉しそうに言葉を返すところが舞なんだろう。

「さて、今は何時だ？」

「大体九時つてところかな」

正確な時間は時計を見ていないので分からない。

「まだ時間はあるようだな」

「作戦とか戦術とかはいらないのか？」

僕が言うとは舞はわざとらしく手をぱんとたたいて。

「それだ！ どうせなら戦術を立てて格好良く殺そう」

……心底呆れた。

「殺すっていうことを芸術か何かと勘違いしていないか？」

「栄凜は変人だから気にするな」

「そういう問題では無い」

やはり舞とは住む世界が違う、長いものには巻かれると言われるが、舞に巻かれるのはごめんだ。

だが舞は、僕の言葉なんて聞きもせず一人で考え込んでいる。ぶつぶつと恐ろしいことをつぶやいている。

「やっぱり細切りかな……いや、千切りも捨てがたい。でもぶつ切りも良いな……」

聞くに堪えなかった。

「面倒だから早めに行かないか？」

僕は病院の場所も知らないし、時間も何も聞いていない。

「備えあれば憂いなしだな。刀と金を持て、金は大量に頼むぞ」

何に使うのか分からないが大人しく舞に従う。リビングに置いてある財布を手に取り、中身を確認。五万円も入っていた。

「五万円もあれば十分だよな？」

「おう」

返事をして舞は和室に向かった、すぐに舞は戻ってきて刀を僕に渡した。

「斜めにして背中に隠せ、金は持ったようだから……準備は万端だな」

背中にぴたりとガムテープで固定された。地肌にガムテープを貼ると剥がずときに痛いことを知らないのだろうか。

そんなことも気にせず舞はすたすたと外へ向かった、僕もそれを追う。

靴を履き、外に出て鍵をかける。

「よし、行くぞ」

舞は歩き出した、僕も歩き出すが背中の刀で動きにくい。それに今からどこへ向かうかも聞いていない。

「どこに行くんだよ？」

「花屋だ」

なぜ花がいるのだろうか。

「栄凛を殺すのに花が必要なのか？」

「今から病院を訪ねるのだ、お見舞いを装う必要があるだろ。だから花を持っていけば怪しまれない」

確かに舞の言うことに一理ある。花くらいあった方がカモフラージュ出来て良い。

「以外と考えているんだな」

「おう！」

小さい身体で小さい胸を張って意気揚々と答える姿はすごく舞らしい。

多分、舞はあらかじめ調べておいたのだろう、花屋への道も、かかる時間も正確だった。

『花屋華』と大きな看板が掛けられている店に到着した。

「花屋『か』？」

舞に尋ねる。

「花屋『はな』だな」

店主はどこかおかしい感性の持ち主だと思われる。

それにしても怪しかった、花屋華の看板を見ると地下二階と書かれている。

「地下二階っておかしくないか？」

「別におかしくは無いだろう」

舞がおかしな感性の持ち主だとは知っていた、だがこれほど酷いとは思わなかった。

「ため息なんてついてどうした？」

自然にため息をついてしまっていた。それほど呆れていたのだ。

「気にしないでくれ、早く花を買いに行こう」

外は明るいのに、異様に暗い階段を、舞が先陣を切って降りていった。

意外にもそこまで狭く無い階段を少し降りるとドアがあった、どうやらここが一階の様だ。そこは静寂、ただコンクリートの階段を降りるときに鳴るコツコツという音しか聞こえなかった。

「本当に花屋なんてあるのか？」

僕が喋ると、声が跳ね返ってきて、小さな声でもエコーがかかって聞こえる。

「もう少し心にゆとりを持て、せっかち過ぎるぞ」

エコーのかかった声で、説教された。

「着いたぞ」

また少し階段を降りると、一階と同じドアが有り『花屋華』と書かれていた。

躊躇うことなく、舞はドアをノックした。すると中から近づいてくる足音が聞こえる。

「今開けます」

低めでドスのきいた声の返事が返ってくる。

ドアがきしみながら開いた。そこには、スラリと背が高く、黒いスーツ姿に店のエプロンを着用した、オールバックで強面の男がいた。

「どこのガキだ、チビ共の来る場所じゃねえぞ。さっさと帰れ」

そういつてドアを閉めようとする、そのとき舞が口を開いた。

「そんな接客だと店をたたむことになるぞ」

「うるさいガキだな。帰れ、今日は店じまいだ」

「やはり姿が変わると分からないものか」

「ガキが何言つてやがる。さあ、帰った帰った」

といって、スーツの男はドアを閉めた。

「花屋に来たのに、花が買えなかったぞ」

舞は僕の言葉を見無視して、再びドアの向こうの男に話しかけた。

「おい、さっきはすまなかった。アタシだ、舞だ」

地下での声はよく響く、だがその音をかき消すようにドアの奥から騒ぐ音が聞こえた。

「舞さん！」

ドアが壊れんばかりの力で、さっきのスーツの男が出てきた。

「舞さんなのか！ 本当に舞さんなのか！？」

男は不安そうだが嬉しそうな曖昧な顔をして聞いた。

そして、舞はズボンの中にあるカッターを取り出してドアに突きつける。カッターの刃を振り下ろし、振り下ろした刃を少しずらしてまた上に上げる。すると刃で斬った部分が斬り取られた。

「これで信用したか？」

「舞さん……また会えるなんて思ってませんでした……」

スーツの男は膝をつき、小さな身体に抱きついて泣き出した。それに対して、舞もスーツの男の頭をなでていた。

この二人はどんな関係なんだろう、スーツの男は舞を慕っているようにしか見えない。多分過去に何かあったのだろう、それにしても異様な光景だ。有紗を超えるだろう身長で、小さい舞の身体に抱きついている姿は端から見たら変態にしか見えない。

「そろそろ本題に移らないか？」

「そうだな。よし、離れる華」

スーツの男は華というらしい。花屋の名前はここから来たんだな。「はい！」

良い返事をして、すぐに立ち上がり軍人のようなポーズを取る。まさに忠犬、舞のペットだな。

「質問があるのですが、こちらの男性は誰なんですか？」

僕のことを見てきよとした顔をしている。

「月森優と言つて、アタシの借りている身体の持ち主の兄貴」

「よろしくお願いします」

僕は頭を軽く頭を下げる。

「こちらこそ、俺は柊華つて言います」

話していると、柊さんはいわゆる体育会系なのだろう。話し方が体育教師にそっくりだ。そして単純なところもそっくり、僕が誰なのか分かって何も無かったかのように強面の顔に戻った。

「懐かしい思い出に浸りたい気持ちで山々です」

「駄目だ、用事があつてここに来たんだ」

この二人面白いコンビかもしれない。特に柊さんは舞と話していると、全く違う人間だ。そのギャップが笑いを誘う。

「お見舞いの花を買いに来たんだ。適当に見繕ってくれ」

「誰のお見舞いですか？」

「優の両親を殺したヤツだ」

舞は嫌な微笑みを浮かべて言った。

「じゃあとびっきりの物用意させて頂きます」

柊さんも舞によく似た笑い声。奇妙な二人だった。

その後、柊さんは店の中に入つていった。その後を追つて、僕ら

も店の中に入る。

店の中は薄暗く、生花を保存するための冷蔵庫の様な物が大半を占めていて、他に見当たる物といえば、換気扇と店の奥の一角にテーブルと椅子が二つあるくらいだ。

「お二人はテーブルで待っていてください。すぐに持ってきますので」

言われたとおりに椅子に腰をかける。

「良い店主に良い店有り、ここの花は綺麗だぞ」

様々な種類の花が冷蔵庫らしき物に保存されている、見たことのない美しい花もあつた。確かにこの花屋、店主は少し変だが良い花屋かもしれない。

椅子に座りながら周りに目を向けると、薄暗い中に花が持つ独特の美しさが心を揺れ動かす。いや、揺れ動かすより動揺に近い感覚が襲う。薄暗い中での綺麗な花々は異様な力を放っているようにも魅せる。

「優さんどうかしましたか？」

終さんが両手に花を抱えて戻ってきた。知らない間、長く花に魅せられていたようだ。

「大丈夫です。それよりその花は何ですか？」

「バラですよ、様々な種類で花束を作らせて頂きました」

「流石だな。華の腕は落ちていないようだ」

白のバラと赤のバラが大半を占めていて、所々に他の色が混ざっているバラの花束だった。

「舞さんのイメージにピッタリです」

「そんなに美しいか、照れるな」

「トゲがありますからね、しかもこれだけの数を集めれば量が半端じゃないですよ」

「ついつい笑いがこぼれる。」

「笑ったな？」

地雷を踏んだようだ。舞が僕のことを睨んでくる。元々睨んでい

るような目をしている、その目で睨まれたら一溜まりもない。

「その……ごめん」

「許す」

ここは舞の素直さがありがたかった。

明るい笑いに満ちていた。舞と柊さんは長年付き合った親友の様に話し合っていた。

暖かい雰囲気、舞の変な笑み以外の笑いを初めて見られて新鮮だった。

「二人ってどんな仲なんだ？」

僕は気になった、柊さんは能力を持っているように見えない。ならばどうやって知り合ったのか。

「恩人ですよ」

「恩人？」

「そう、恩人。舞さんのおかげで今の花屋と俺が在るのです」

「そんな大したことはしていない。華は大袈裟すぎる」

舞が柊さんに対して恩を売ったのだらう。

「どんな偉業をしたんだ？」

二人が顔を見つめ合い、沈黙が起きる。聞いてはならない事柄、もしくは言いにくい事柄。

柊さんがアイコンタクトを送り、舞は一つ頷く。

「ごめんね、舞さんにも守秘義務が有るから」

「いえ、言いたくないならいいです」

「すまん、いずれ話すさ。今話すと長くなるしな」

それもそれで良いと思う、柊さんが言ったように守秘義務が有る。言いたくないことに深入りすることはあまり良い結果を招かない。

「それじゃあ代金はいいいので、気をつけて行ってくださいね」

「ああ、すまないな。また来るよ」

僕の質問が会話の境目になり、舞は椅子から立ち上がり、バラの花束を持って外へ向かう。僕がそれについて行く。

「あつ、これ名刺です」

なぜか柊さんに呼び止められた。

「何で名刺なんですか？」

「口コミでこの店の宣伝を……」

抜け目のない人だ。だが、花の代金も無料だったことだし喜んで引き受けた。

「出来る限りの範囲でやらせて頂きます」

「ありがとうございます。予約などのときは名刺に電話番号がありますので、そこをお願いします」

そういつて柊さんは頭を下げて、見送ってくれた。

花屋を出た後、僕は舞に花束を渡され荷物係になった。刀が背中に収まっているのに容赦無い。

さっきの質問のせいだろうか、舞は黙々と歩いた。僕は話題を振ることも出来ず、ただ後を追った。

少し歩くとバス停に着いた。

「ここからバスで病院に直行だ」

バスの時刻表を見ると、数分でバスがちょうど到着する時間。行き先は近くの総合病院、リハビリなどの設備が良い環境で整っていると頻繁に聞くところだ。

「本当に入院しているのだろうか？」

「調査済みだ、間違いない」

全部が舞の手のひらの上で進んでいるような気もするが、ここは従うしかないのだろう。

バラの香りが鼻孔をくすぐって数分、バスが到着する。僕らは乗り込み、空いていた席に二人で座る。総合病院まで結構時間がかかりそうだ。

その間、僕はこの大きなバラを持って痛い視線を浴び続けると思うと……。

「なあ……これは目立ちすぎじゃないか？」

「そうか？」

舞に同意を求めたことが間違いだったようだ。

バスは軽快に総合病院へ向かっている。栄凜を殺すんだ……舞を悲しませないためにも思っていたが、落ち着いて考え直すとやはり殺すということは絶対にはならない。かといって舞を今から説得するなんて不可能だろう、やっぱり最後は殺すんだろうな……何とも言えないこの気持ち、総合病院が近付くにつれてモヤモヤ感が増していく。

「あのさ、ちょっとお願いがあるんだ」

「ん？ 何だ？」

今のままでは舞の自己満足だ、僕が喜ぶわけでもない。だから提案を持ちかけた。

「栄凜と話がしたいんだ。両親を殺した理由とか色々……」

「優がどうしても言うなら別に良いが」

舞は良い奴だ。だがもう一つ約束が欲しかった。

「それともう一つ……殺すなって言ったら、殺さないでもらえるか？」

……無言、バスに人がいるのにこんな会話不謹慎だ、分かっている、でもここで確かめておかないと舞は確実に殺すだろう。

「……………無理だ」

「分かった……諦める」

舞はこくりと頷いた。栄凜は確実に殺せると豪語していた、舞の言っていることは正しいだろう。

それから総合病院前に着くまで無言、舞に至っては呼吸の音も聞こえないくらい静か。バスの走る音、他の利用者の喋り声、全部聞こえたが耳には入らなかった。

——僕は覚悟を決めた。

「よし、作戦開始だな」

「おう」

問題無い、いつもの舞だ、これで良い。

総合病院の自動ドアをくぐり、大きく分かりやすく書いてある案内図を見る。病室は二階から五階の間のような、お見舞いの際にはナースセンターにお立ち寄りくださいとも書かれている。

「ナースセンターか……これは危ないだろ？」

「記録でも残るのか？」

「残るだろうな、氷凜の死体がそこで見つければ、僕たちが真っ先に犯人扱いだろう。どうするんだ？」

いくら何でも警察に見つかったら終わりだ。刀も有るし、僕が嘘を突き通せるとも思わない。

「どうするも何も、部屋番号が分かるから心配はいらないぞ」

「は？」

拍子抜け、何の変哲もない顔をして凄いことを言う。

「問題が有るとしたら監視カメラだ。病室の方には付いていないだろう、プライバシーが有るからな。でもナースセンターの近くには有るだろう？」

「何でも分かっているのですね。感心しました」

「照れるだろうが」

こんなヤツが今から殺人行為を行うのか、やはり氣にくわない。だが表情に出さないように氣をつける、覚悟は決まったんだ。

「それにしても凄い情報網だな。どこから仕入れてるんだか」

「秘密」

可愛く言っても目が恐いんだよ。

「何か思ったか？」

「何も思っていないけど」

コイツはエスパーかよ。うわ、睨んだ。

とりあえず案内図の前にいるのはまずい、流石に総合病院だけあって人通りが多い、その中にこの花束を持つ僕はとても目立ってい

る。

「まずは人が少ないところへ移動だな」

「おう」

僕は適当に歩き始めた。だが、どこへ行っても人が多い。

「もう面倒だ、病室に行くぞ」

「ちよつと待てよ、大丈夫なのか？」

「そんな花束もってるほうが怪しまれる」

それもそうだ、早めに行くのが吉かもしれない。

「三階の三百六十二号室だ。階段とエレベーターどっちが良い？」

「階段の方が良いだろう、臨機応変に対応できる」

「分かった、それじゃあ階段を探そう」

広い、階段を探すのも一苦労。案内図でおおよその場所は分かるが、歩いてみると意外と違うので困る。だが舞がいる、舞は性格に案内図を理解して階段まで僕を導いてくれる。

「本当に頼りになるよな」

一階と二階の間の階段の踊り場で人が少なく、声が通りやすくて楽だ。

「何がだ？」

「しっかりと案内図を把握していた事だよ」

「慣れだろ、敵の周囲のことまで知ることが大事だ」

舞の真剣さが伝わってくる、柊さんと話していた柔らかな雰囲気ではなく、本気だ。

「二階にはナースステーションがある、気にせず三階に行くぞ」

「あ、ああ」

「雑念を捨てろ、返事はきちんと」

「おう」

舞はそれで良いと言うようにうんうんと頷き、階段を上る。

二階に上がると、そこには視界一杯にナースステーションと出て

いる。だがそんなことは関係ない、舞はそのまま三階へ直行。僕も躊躇ってはならない、舞に続く。

「監視カメラは無かったな」

「そんなところまで見てるのか……」

「当然だ」

舞の観察力、当然だと言うが一般人の僕には到底出来ない。能力者というのはこんなにも凄いのか、それとも舞が場数を踏んでいるからなのだろうか。それは分からない、ただ間違いなく言えること、舞はただ者じゃない。こうなると栄凜も恐くない、舞がいれば何でも出来ると思える。

「三百六十二号室。そこに栄凜が居るんだな」

「おう」

栄凜の場所を確かめ、僕らは向かう。何が起こつても僕の覚悟は決まっている。

*

栄凜の入院している個室の前、もう少しで一つの命が終止符を打つことになるだろう。僕の復讐、望んでいない復讐。今の舞は真剣な顔つきだが、楽しんでいる、間違いない。たった数日間、そのうちの数時間しか舞とは会っていない、それでも分かる。分かりやすいヤツなんだ、素直なヤツだよ本当に。

「いよいよだ、アタシが栄凜を一瞬で殺せる範囲に入ったら尋問でも拷問でも何でもしていい。ただ、優は絶対に何があっても殴ったり、蹴ったり、殺したりするのは禁止。それはアタシの仕事だ、絶対だぞ」

小声だが、力のこもった言葉。初めてあつた頃と同じ変な感じ、この感じは舞から出ていると思われる。舞の殺気なのだろうか、詳しいことは分からないが僕の鼓動が高鳴るのは分かる。

「分かった、刀を取ってくれ。僕が先に入るから後ろに隠れて入っ

てくれ、それなら刀を隠せる」

「危ないだろう、アタシが一気に攻める」

「別に危なくても良い、乗りかかった船だ最後まで乗ってやるよ」
嬉しそくに僕を見てくる舞の瞳がぐるぐると回っているように見える、これは錯覚なのだろうか、僕の鼓動はどんどん高くなる。

「格好良くなった、惚れちまうぜ。じゃあ刀取るぞ、ガムテープ痛いぞ」

背中をめくって一気にはぎ取る。

「おまえ！ ちょっとは優しく……」

「静かにしろ」

歯を食いしばって、痛さを堪える。ガムテープは反則だ。

「よし、作戦開始」

「間違っても僕の愛しの妹の身体で死なないでくれよ」

「行くぜ」

「「おう！」」

息もバツチリ、僕はスライド式のドアを開ける。あくまでも静かに、怪しいそぶりを見せない程度に。

部屋の中はカーテンが掛かっていてベッドが見えない、だが物音がするので栄凛は間違いない。どうやら一人だ。後ろに舞がくっついていて確認してカーテンにそっと手をかける。

「おや、誰かな？」

栄凛の声だ、男の声にしては聞き取りやすく、透き通っている様だ。

「どうもこんにちは」

ちよつと良い声を出し、カーテンを一気に開ける。舞は刀を抜いて栄凛に向かって飛びかかった。

急な出来事、勿論栄凛は対処できない。舞は首元に刀を当て、殺す準備が出来た。僕はバラの花束を栄凛の元へ投げた。

「君たちは誰かな？」

全く動じない、予想外だった。いくら能力者でも、いきなり刀を

持った少女が飛びかかってきたら驚くと思っていた。だが栄凜は首元に刀身を当てられても動じない、これが能力者の器なのか。

「人斬りの『舞』だよ」

「何だ舞か、元気だったか？」

「ああ、とつても元気だ、栄凜を殺せるくらいな……あはっ」

面識があるのは聞いていた、誰か分からないということは今の面影が無い舞に会ったのだらう。それにしても全身包帯だらけ、右腕と目から口までの間しか肌が見えない。

「そちらの青年は誰かな？」

「月森桜の息子だ」

「ゼウスの息子さんですか、面白いですね」

栄凜は母親の事をゼウスと呼ぶのか、何かの神話でそんな名前を聞いたことがある。

「息子さんが何の用ですか？ 舞にただ付いてきただけかな？」

「栄凜、お前に聞きたい事がある」

「ゼウスの事ですか？」

僕は無言で頷く。

「ふむ、面倒です。そんなどうでもいい事は喋りたくないですね。

ゼウスはどうせもう死んでいる、故人の事なんてつまらないですよ」

「首元には刀がある、いつでも殺せるんだ。無駄口を叩いていないで話せよ」

「優、熱くなるな、いつも通り落ち着いて話せ」

どうも調子が狂う、刀に動じない、能力を使ってくるわけでもない。落ち着け、殺そうと思えばすぐに殺せる、明らかにこちらが有利なんだ。

「いいから話を聞かせてくれ」

「嫌だつて言ってるだらう、それより君の事が知りたいな。ゼウスの息子さんの名前が知りたいな」

僕の手は自然と握り拳を作っていた。あざ笑うかのように僕を見るその瞳、隣で刀を構えてる舞には目もくれず、ただ僕を凝視して

くる。怒りを隠しきれない。

「おい、黙れよ」

口を開いたのは舞だった。そして舞は刀で栄凪の小指を斬った。
「舞こそ黙ってくれないか？」

栄凪は動じない、小指が綺麗に斬れて床に落ちている。血も垂れて
いるのに動じない。

「今、優は握り拳を作った。つまり殴りたいって事なのさ、だから
アタシが優の代わりに痛めつけた」

そこまで言って刀をまた首もとまで戻して、僕と視線を合わせた。
「そういう約束だったはずだ、優には手を出させない」

目つきの悪い目で、瞳は渦を巻いているように見える。舞は僕に
何かを訴えているようだった。

「優って言うのか。それじゃあ優君話を戻そうじゃないか」

まだ言うか、しかも軽々しく僕の名前を呼びやがる。

「優君は何歳なのかな？ 多分学生だと思っただが」

「そんなこと関係ないだろう。話を戻すなら母親の話に戻せ」

栄凪は困ったと言うジェスチャーを取り。

「仕方がない、君が答えてくれたら俺も答えよう。これで五分五分、
それならいいだろう？」

明らかに間違っている、質問しているのは僕。こちらが有利、あ
ちらはいつ殺されてもおかしくない状況。なのに何であんな事が言
える、気が狂っている。

「そんなの……」

「優！ 条件を飲め」

「舞……」

言葉を遮るように舞が怒鳴った。今の舞は信用できる、腑に落ち
ないが仕方がない。

「高校二年」

「青春だね。恋人はいるのかな？」

「いない」

「勿体ない、そんな良い顔立ちをしているのに」

「答えたんだ、こっちの質問も答えるよ」

「まだ早いよ、こんなの質問の内に入らないよ」

「ペースにはまりそうになる、舞がせつかく崩してくれたんだ、持つて行かれては困る。」

「じゃあ質問をしろ」

「仕方ないな……じゃあ質問だ、俺のことをどう思ってる？」

何について質問するかと思ったら、くだらないこと。

「むかつく野郎で、頭のネジが飛んでる野郎で、気持ち悪い野郎だ」

「ふむ、分かったよ」

反応が無い、何がしたいのかわからない。今度はこちらが質問する番。

「何で両親を殺したんだ？」

「『何』というのは動機かな？ それとも武器かな？」

「動機だ」

「動機か……」

小さいことを気にする野郎だ。

「ゼウスはとても凄い能力を持っていた。ゼウスは恐怖の対象であったり、憧れの対象でもあった。俺はそんなゼウスを殺したかった、名声が欲しかった。ゼウスを殺した男として皆から崇められたかった。ゼウスを倒そうと思った人々は沢山いた、だが皆返り討ち、その中でゼウスを殺したら名前も知られるしいつらから名声をもらえるとと思ったからだ。自己満足の殺人だよ、ゼウスに個人的な恨みは無い」

「名声か……くだらないことで両親を殺して、藍を傷つけたのか。本当に最低な野郎だ。」

「じゃあ次の質問だ、俺のことを『むかつく野郎』と言ったね、それはなんでかな？」

「それはあなたが質問に答えなかったり、話を聞こうとしなかったからだ」

「なら俺も優君の事がむかつくよ、俺はあんなに詳しく説明したのに、優君は一言二言で返す。質問はもつと詳しく答えてくれないかな?」

オウム返しされる。質問の内容はひねくれているが間違ったことは言っていない。

「質問には答えたはずだ」

僕の答えを無視して栄凛は話し続ける。

「よく考えてごらん、優君は俺に対して腹を立てていない。事が上手く進んでいない状況に対して腹を立てている。もしくは、事を上手く進められていない自分に対して腹を立てている。そうだろ? 違うかな? どうなんだ、さっきの答えにくい質問を取り消して、

三択の質問に変えてあげよう」

三択目はどちらでもない、もしくは答えられないということだろう。ここで三択目を選ぶではならない。栄凛の思うつぼ、手のひらで踊らされるだけだ。

「別に三択になったところで変わらない、僕は僕自身にもこの状況にも腹を立てていない。腹が立つのは栄凛お前だよ」

そう言いきった。惑わそうとしたって無駄、相手の話を真に受けるから惑わされる、最初から聞き流せばいい。

「確かに君は質問に答えた。はめようとしても無駄か……それでこそゼウスの息子さんだ」

栄凛はまったく動じない上、ピンチだというのに僕をはめようとした。どうしてこんな命知らずな行為を出来る、それに舞の刀にも全くおびえていない。

「あの飛行機事故で大勢の人々が死んだ、そんなことを犯してあなたには罪の意識とかは無いのですか?」

相手がなぜおびえないか、そんなことは後回しだ。

「俺だって人間さ、小さい子供が迷子になっていたら親御さんを探したくなる、お年寄りが道を尋ねてきたら丁寧にお見送りもしたくなるさ」

罪の意識はあるようだ、まだまだ善意の心を失っていないだけ救いようがある。

「ただ、能力者同士の殺しは別、互いにリスクがある。確かに乗客には悪かったがこっちも命をかけていた、俺だって死ぬ可能性があった。飛行機事故に件については全く罪の意識は無い。それにゼウスが能力を使用しなかったから乗客の大半は死んだ、俺の能力だと自分を守るのが精一杯、大量の死人が出たことが気に食わないのならゼウスを憎め」

「能力を使わなかった!？」

今まで何も喋らなかつた舞が突然口を開いた。能力を使わないことはそんなに大変なことなのか？

「何一つ使用しなかつた。大勢の乗客が泣き叫び、嘆き苦しんで、みんなしどろもどろになりながら助けを求めていたのにゼウスは力を発動させなかつた」

「どうして！　桜がそんなことするわけ無い！」

息が荒くなり、今にも氷凜を斬り刻んでしまいそうな勢い。

「落ち着け！」

「黙れ！　これはアタシの問題だ！」

元から酷いのに関の目は今まで見た中で一番酷い。

「何でだ、なぜ能力を使わなかつた、理由を言え！　早く言え！」

「理由なんて知ったこっちゃ無い。確かにゼウスが能力を使用しないのは不思議に感じた、だが理由までは分からない。とりあえずその怖い顔やめろ、可愛い顔が勿体ない」

こんな状況でも冗談を言う氷凜、そんなこと気にもせず理由と問いたず舞、訳も分からず入り込めない僕。どうしろって言っただ、話が訳の分からない方向へ進んで行くのもう勘弁だ。

「アタシより頭良いだろうが、理由ぐらい考えやがれ！」

無茶苦茶だ。

「考えられるのは二つだけ。『使わなかつた』のか『使えなかつた』のどちらか」

「使えなかった…… どういう意味だ？」

不思議そうな顔をする、さっきまでの怒りは消え、母親の不可解な行動の理解するための苦慮へ変わった様だ。

「どうして能力を使わないと変なんだ？」

母親が優しい人だとは知っている、でも自分がピンチなら人を助ける事は無理じゃないだろうか？　すると舞が口を開く。

「桜が困っている人を助けられないなんて……」

「「あり得ない」」

声がハモる。

「だから俺は飛行機という閉鎖空間を選んだんだ、隙が生まれるからさ。でも、ゼウスは簡単に死んだ。能力を使わず、他の乗客と一緒にボロボロのバラバラ、肉の塊で燃えるゴミになった」

栄凜が飛行機を選んだ理由が分かった。納得だ、母親の考え方を讀んだ上での行動、理屈っぽい栄凜にはピッタリ合っている。

「何だつてんだ…… 桜が能力を使わなかった…… 二十年前はあれだけ伝説を作りまくったのに、こんな糞弱いヤツに負けやがって……」

誰かに言っているつもりは無いのだろう、歯を食いしばりながら小さく言葉を漏らす舞を見ていると、悔しさが痛いくらい伝わってくる。

「ゼウスはあときには能力を失っていたのかもしれない、その可能性が一番高いと思われる」

「能力を失う？」

僕はつい言葉が漏れた。そんなこと思いもしなかった、能力は永遠にその人に宿り続けるものだと思いこんでいた。

「生まれる事も失う事もある、俺は物心付いたときにはすでに使っていた。俺の教え子の三割は開発することに成功した、俺は能力開発集団を作ったことがあるんだよ。俺のアテナは最強だった、今度会ったら殺されないように気をつけないといけないよ」

「栄凜…… 栄凜、お前はそんなことまでしていたのか……」

人を殺せる能力を開発する、そんなこと許されない……

「能力開発集団の話は後にしよう、それより能力が消えるという話だ」

そうだった、あまり怒ってはならない。冷静に栄凜の言葉を聞き取り、理解しなくてはならない。

「能力を使う人々には何らかの野望、願望といった望みがあるはずだ。それを実現するための思いが強ければ強いほど能力が生まれることが多い、これは俺の実験でほぼ確実だろうと言うところまで立証されている。だが、失うという思考は最近になって生み出された、俺の能力開発集団は能力を失うという実験も行い始めた。実験台は俺を使つて、実験は成功した。能力を失うということはあり得るのだ」

「今、自分を実験台にしたつて……」

「ああ、言つたよ」

重要であろうことをペラペラと平坦な口調で言う、自分が能力を失ったことも……

「俺はもうただの一般人だ」

栄凜は能力者じゃない、舞に殺されそうになつても動じなかったのは諦め、もしくは死なんてどうでも良いことなのだろう。

「優君には観察力が足りないね、俺の指が切れ落ちてる、この時点で弾丸に出来る物があつたんだ。隙を見てそれを舞の腕にでも打ち込み、腕を一時的に麻痺させることも出来る、だがそれをしなかった。いや、出来なかった。それに気が付かない優君はまだまだお子ちゃまだね」

言われてみればその通り、舞はずっと刀を構えていたけれど隙がなかったとは言えない。能力者ならば狙えないこともないタイミンががたくさんあつたはずなのに、栄凜は行動に移さなかった。ヒントは十分に出ていたのにもかかわらず僕は何も気が付かなかった。

「そんな事はどうでもいい、桜は何で能力が消えた」

黙っていたり、質問したり、行動に落ち着きが見られない。

「少なくとも二十年前は使えていた、だが俺が殺したときは使えな

かった。その間、ゼウスが身を隠していたときに何かがあったのだろ。う。まだ能力が失われるということしか分かっていない、俺の様に望みが叶うと能力が消えるというパターンしか立証されていない。ゼウスがどうして能力を失ったかはそんな安易に理解することは出来ない」

望みを叶えるか、栄凜の望みは母親を殺すことだったわけだ。もうこれ以上栄凜は人を殺さないということか……

「桜の望みは人々を救うって事だとアタシは思う、なら理由は『アレ』しかないか……」

「分かるのか!？」

初めて栄凜の動揺が見られた。あそこまでクールだったのに、舞のこの一言で過剰反応を見せるなんて意外だった。

「おおよその推測は出来た、桜らしい理由だな」

「頼む、少しでも教えてくれないか？」

これが栄凜の本性なのだろうか、首元に刀身があるので動けないが必死さが言葉から伝わってくる。

「お前には一生かかっても理解できないさ、一生もそろそろ終わるけどな」

悩みながら死ぬなんてこれ以上酷い事は無いだろう、悔いが残ったまま死ぬなんて……

「能力開発集団のためにも、昔のよしみで教えてくれ。頼む」

昔のよしみ、舞と栄凜の過去によしみなんてあるのだろうか？

戦いあった事しか聞いていないから分からないが栄凜は言葉遊びのような冗談を言う奴じゃない。

「昔のよしみ？ 知ったこっちゃねえ」

「忘れたとは言わせなっ……」

舞が刀の柄で栄凜ののど仏を突く。

「何してるんだ!」

「黙らせたんだ、ちょっと五月蠅かったからな」

「……何か隠しているのか？」

この行動、いくら何でも変だ。舞の話になつてからすぐこれ……何か隠しているようにしか考えられない。

「隠してない」

「後ろめたいことでもあるんじゃないのか？」

「無い」

いつもの舞、だけどこか違う。

「ごぼっ！ ごぼっ！」

栄凜は首が斬れないように反るようにして咳をする。

「おい、苦しそうだぞ！」

「どうせ殺すんだ、関係ないだろう」

結末は一緒でも、舞の能力は人を苦しめないで殺せる利点があるのに、これじゃあ生き地獄だ。

「殺すなら苦しめないで殺せよ！」

「栄凜は飛行機事故で大勢の人を苦しめた、その報いだろ」

咳が止まらず、苦しそうにしている栄凜。死ぬのは覚悟していたが、苦しい姿を見ているとやはり辛い。

「いつそ殺せよ、早く殺した方があっさりいけるだろう！」

「優は殺しについて、口を出しちや駄目だ」

殺しには口を出さない代わりに貰ったこの時間、約束は約束なのか……

「そうだろ、口出しは無しって約束だったはずだ！ 忘れたなんて言わせないぞ、優はお利口だもんな」

舞は僕の約束を守った、なら僕も守るしかない。

「栄凜、色々な事が分かった、本当は舞に殺さないでくれって頼むつもりだった。でも、無理っばいごめん……そしてありがとう」

やっぱり本心は殺すなんて嫌だった、栄凜が最低な野郎じゃなかったら泣き寝入りして舞に生かしておいてもらうつもりだった。人の死は悲しみをもたらすから人が死ぬのは嫌いなんだ。

栄凜は咳をしながらも分かったと言う様なアイコンタクトを送ってきた。

「あはっ、優に良い知らせがある」

良い知らせと言っのに、気味の悪い笑い方。

「……何だよ」

「栄凜は殺さない」

聞き間違いではない、殺さないと言った。舞が栄凜を殺さない、
どういう事だ？

「栄凜は半殺しにして生かしておく、ボコボコにしてぐちゃぐちゃ
にしてみじん切りにして生かしておく」

「何でそんなえげつないこと……」

殺したがる舞が何で半殺しなんて方法をとるのだろうか、でも殺
さないという言葉が聞けて驚きと安心感があつた。

「別に殺してもいいのだが、優が嫌がるじゃないか。それともう栄
凜は能力者じゃない、アタシが殺すヤツは能力者だけ、一般人のヤ
ツらは殺さなくていいが栄凜は元能力者だから別だ」

「ごほっ！ それなっ……ごっ殺さなっ……」

咳混じりで命乞いをしている。ここまでされると流石の栄凜も混
乱状態になる様だ、あれだけクールだった栄凜が苦しんでいる姿は
滑稽だ。

「五月蠅い」

また柄で栄凜ののど仏を叩く、叩く、叩く、叩く……。

「おい！」

「殺しには口出すな！」

舞の暴行は止まらない、ずっと、ずっと、ずっと、殴って、叩い
て、殴って、叩いて、栄凜への暴行が絶えない。

「でも！」

「そんなに甘く無いんだよ！」

——大嫌いな目だ、これが嫌だから眼鏡を買い与えた。何でまた
この瞳を見てしまったのだろう……何度えぐり出してやろうと思っ
たか、何度握りつぶしてやろうと思ったか。

鼓動が異様に高鳴る、血管が浮き出るのが分かる、頭痛が襲う、

吐き気が襲う、手の震えが止まらない……。

「舞……止めてくれ……」

「死ね！ 糞！ ゴミ！ 屑！ 消えろ！」

「止め……ろって……」

小さくつぶやく、こんな声じゃ伝わるわけがないのに……。

「もう一生その減らず口叩かせてやらねえ！ お前の無駄話で迷惑してるヤツらだっているんだよ！ 死んでしまえばいいんだ！」

血が出てるって、柄が汚れてるって、本当に死んじゃうって……。

「泣けよ、叫べよ、嘆けよ、悶えろよ」

「だからもう……」

やめてやれよ……。

——そこで気を失った。

*

まぶたが重くて目が開かない。冷たくて硬い床に転がっている状況にあるのは分かる。意識が朦朧としている、頭がズキズキ響く。

何が起こったつけ……何でこんなところにいるんだつけ？

気を失う前の記憶があやふや、栄凜を殺すために来て、舞の目が大嫌いな目になって半殺しにしようとしていた。でも、何で僕は気を失ったのだろうか。

「痛っ！」

時間が経って脳が働きだしたからなのか、額に痛みを感じた。

何だこれ、触ってみると腫れていた。何でこんな事に……

相変わらず目が開かず、状況が把握できない。せめて舞がいればどうにかなるのに。

「おい舞、どこかにいないか？」

返事がない、僕は一人のようだ。

すると、ドアのスライドする音。

「起きたか、どこか痛いところは？」

「いるなら返事くらいしてくれよ」

「悪いな」

安心した、ドアの開く音が聞こえたから、あの人通りの少ない三階の廊下、氷凜の病室前だろう。

「額のところが腫れて、まぶたが重くて目を開ける気にならない」

「それだけか？」

「それだけだ」

いつもの舞の口調、どんな目をしてるだろうか。いつもの目だろうか、あのとときの忌々しい目なのだろうか。

「頭に包帯巻いてやるからじっとしてろ」

言われたとおり大人しく、舞に身体を預ける。首の後ろに手を回され、膝の上に頭を置かれる……膝枕だ。くるくると包帯を器用に巻かれていくのが感じられる。

「大人しくて可愛いな」

「身体を動かすのが疲れるからだ」

本当は恥ずかしい、子供の頃に帰ったような感覚。赤ん坊は首を押さえてだっこされる、その感覚に似ているのかもしれない、妙に落ち着く。

「まだ目は開かないのか？」

「もう少して開きそうかな」

もうまぶたの重みは無くなっていた、だが身体はひどく疲れている。全身を舞に任せ、もう少しこうしようと思った。

「目が開かないならその間に刀をしまっぞ」

そう言っただけで僕の身体を転がす。また冷たい床とご対面だ。

「ガムテープが無かったから、包帯にするぞ」

僕の上着を脱がし刀を背中当てる。これが冷たい……そんなことはお構いなしで背中に包帯を巻き付ける。

「腹の方が通せないな、少し浮かせる」

だるい身体に鞭を打って身体を軽く浮かせる。

「しばらくそのままにしている」

無理矢理な要求、飲めるわけがない。

「これくらいでへこたれるな！」

「疲れてるんだよ！」

「それならこうする」

包帯が腹に食い込む、あまりの痛さに目を開けてしまう。

「やっとお目覚めか、これで刀が落ちないぞ」

「人を人形みたいに扱うな……」

強く結んで落とさないという魂胆か、もう少し良い考えは無いのだろうか。

「アタシも疲れたな……」

大きなあくびをして、廊下の壁にもたれかかって身体を預けている。僕も疲れているけどそろそろ動けるだろう。

「早く家に帰って休みたいよ、そろそろ戻らないか？」

舞が催促してくる、僕は残り少ない体力で頑張つて起きあがる。

「長々と寝転がっていて悪かったな」

「気にするな、それより家に帰るのが先決だな」

僕らは外へ向かって歩き出した。

病院独特の匂いというのか、あの雰囲気とは違う外の空気はさすがしく、もう榮凜を半殺ししたことなどどうでも良くなっていた。

「——気持ちいいな」

「半殺しつても悪くない、助けを求める時の仕草がたまらなかった」

「前言撤回だ。人が良い気分の時に殺しの話とかするな」

「半殺しだ」

「どっちも変わらない」

「生きているか死んでいるかの違いがあるのに？」

もう面倒臭くなった。頑固なヤツに刃向かってでも無駄に決まっている、特に相手が舞だから尚更だ。

バス停に行こうと思い歩き出すと、途中に時計があった。

「もうこんな時間か、腹空かないか？」

時間は約二時半、かなりの時間気絶していたのかもしれない。

「確かに減ったな、アタシもあれだけ騒いだからな」

「なら決まりだ、何食べる？」

「カレー」

そういえば舞はカレーが大が付くほど好きだった。

「じゃあ適当にファミレスにでも行こうか」

「いや、カレー専門店だ」

「もう好きにしてくれ」

何でそんなにカレーが好きなのだろう。舞でもカレーに毒を盛られたら簡単に殺すことが出来そうだ……いや、そんな縁起でもないこと考えてはいけない。

「じゃあ行くぞこの近くに一軒あるはずだ」

「どんなことも知っているんですね」

「おう」

簡単な返事、もうカレーしか頭に無いのだろう。僕は黙って舞について行く、また凄いところに連れて行かれるのだろう。

総合病院を出て、バスに乗らず街の中心部を歩いている。こんなところに柗さんの様な店があるとは思えないな。

「どこにあるんだよ？」

「あそこに黄色い看板が見えるだろう、そこだ」

「あそこって……まさか……」

僕でも知ってる、友人も大半は知っているだろう。有名なカレーハウスだった。

店にはいると時間も時間なので人はまばらで、適当に席に着き、僕は適当に注文した。

「フライドチキンカレーで米は二百円増し、辛さは六、トッピングに半熟玉子で頼む。あとポテトサラダも頼む」

舞の注文が終わり、店員は厨房へ戻って行く。

「……慣れてるな」

「まあな」

何で胸張って、鼻を高くしているかが分からないが、これで満足するなら安い物だ。

食事が運ばれてくるまでの時間は退屈なものだ。舞は興奮しながら目を輝かせている、笑っている目はそれほど酷い目じゃないということに気が付いた。

「やっぱり、笑って食事が一番だよな」

「そうだな良いことを言ったぞ。自然に笑みがこぼれるこの食事というのはとても素晴らしい」

「舞の場合はカレーだからだろうけど、確かにそうだな」

僕と藍と有紗で食べたあの食事を思い出す、有紗が来てくれたおかげで月森家に久々の笑みが生まれた。また呼んだら来てくれるだろうか、今度誘ってみよう。

「この待っている時間が店の陰謀の様に思える」

「それは違う」

自然に溢れる笑み、弾む会話。ずっと続けばいいと思った。

そんな事を思っていると注文が届く、テーブルの上に並べられた食事は決して豪華な物では無かったが、美味しそうな香りを漂わせて自己主張していた。僕のだけは……。

「舞……赤黒いぞ、そのカレー」

ここでもこんなに珍しい物を拝めると思わなかった。

「そうか？ ヒ素でも入ってるのかな？」

「それは言っちゃいけないぞ」

「冗談だよ、軽いジョークさ」

「それはブラックジョークって言うんだ」

それにしても凄い色をしている。カレーに赤黒いトッピングがされてる、見ているだけで涙が出てきそうだ。

「冷めないうちに食え、それが食の神に対する感謝の印だ」

「食の神ねえ……」

よくあんな赤黒い物食べられるな……絶対辛い、というか辛いレベルを超えていそうだ。

「美味しいな、やっぱりカレーはここに限る」

平然と食べているとそんなに辛く無い様にも見える、意外と大丈夫かも。

「ちよつと一口くれないか？」

「代わりにアタシにも一口な」

といって皿を交換する。近付くと分かる、これは違う、あまりに凄いカレーの香りで目が痛くなる。

「これも美味しいな、今度来たときに頼んでみようか。……どうした？ 早く食べてくれ」

急かされ、おそろおそろカレーをスプーンですくい口に運ぶ。

「ぐ！？」

「ぐ？ 具は食べてないだろうが」

舞は笑ってるけど、これは笑い事じゃない辛さ、急いで水を飲む。

「おい！ これ人の食べるものじゃない！」

「失礼なことを言うな、店員が見てるぞ」

確かに言い過ぎかもしれないけど、とにかくこれは食べられない、辛すぎる。

「辛いとかのレベルじゃない、痛いぞ！」

「これで辛いのか？ もう少し辛くても大丈夫だが……」

味覚が狂っているんだ。そうだ、そうに違いない。

「今からでも遅くない、病院に行こう」

「また栄凛でも殴りに行くのか？」

もう何を言っても無駄、まだ口の中が熱いので水を飲む。

「食欲が無くなった……」

「じゃあ代わりに食べよう」

皿を奪われる。もう好きにしてくれ。満面の笑みでカレーを食べている、子供のように純粋な顔だ。

「そうだ、栄凛に復讐したよな」

きょんとした顔をして、カレーを食べながらうなずいた。

「舞はこれからどうするんだ？」

口にほおばったカレーを飲み込み。

「別にどうもしない。妹さんが死ぬまでこの身体に取り憑くしか無いだろう、もしくは成仏するという事もあるが考えられないな」

「藍はどうなるんだ？ このまま舞に乗っ取られた状態が続くのか？」

「別に用事が無ければアタシは出てこないよ、夕飯がカレーだったから何が何でも出てくるけどな」

笑いながら答えると、またカレーを食べ始めた。

「理由がなければ会えないのか……」

誰にも聞こえない様にぼそっとつぶやいてしまう。少し寂しい気もするが舞がそうするならそうするしかない。

舞は食べることを止めない。二皿目に突入して初めて水に口を付けた。

「よくあのカレーを水無しで……」

恐怖カレー女あらわる。

「サラダも美味いぞ、カレーカレー野菜の順で食べなければ身体に良くないからな」

「カレーが二回ある時点で身体に良くない」

「シーフードカレーだって野菜カレーだってあるんだぞ」

何で胸を張るんだ。どこに誇らしいところがあったんだよ。と言いたいが満面の笑みで主張されるとその気も失せる。

「まあいいさ、食ったら帰るぞ」

「おう」

返事をしてまたカレーに口を運ぶ。

僕へ幸せを運んだのは辛さだというのが皮肉で仕方ない。

僕はカレーを食べ終えてバスに乗ってすぐに帰宅。背中から刀を外し、和室に丁寧に戻す。その際舞がきちんと手入れをしていた。家に着いてみれば時計はもう四時を指していて、何をするにも微妙な時間であった。

「アタシは寝る、もう妹さんに身体を返すからフォローよろしく頼むぞ」

「残念だ、僕も寝る。僕が寝た後に寝てくれ」

そう言っただけでリビングを出て、自室へ向かう。もう身体が重く、階段を上るのも苦しい。ベッドが恋しいなんて久しぶりの感覚。自室に入った瞬間ベッドに倒れ込む、今日一日の疲れをじわりじわりと身体で感じる。今日の寝付きは良さそうだ。

目を閉じるとすぐに寝てしまおうと思ったが、意外にも栄凛の事を思い出してしまった。最初は冷静沈着で何事にもクールに答えていた栄凛、徐々にその皮が剥がされて終いにはあの始末。決して面白いものでは無いのだが思い出すと笑ってしまう。栄凛は頭が良くてあらゆる知識があったのだろう、だがそれ故に知らないことに過剰反応してしまう、知識の探求者だったのだ。僕はそう思う。それが崩れ、舞にボコボコにされ、その後はよく覚えていない。

「何か引つかかる、何で気絶したのだろうか」

前にも舞がテーブルを斬り刻んだ時も意識が飛んでしまった、あのときの事もほとんど覚えていない。

「なぜか大事なところだけ抜け落ちてる」

都合の良い記憶だ、もう少し役に立つところを頭にたたき込んでくれ。

——そんなことを考えている間に睡魔がやってきた。

第三章（後書き）

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

少し独り言でも書いてみようと思います。

私が初めて書き上げた作品で、プロットも中途半端ですし文章も稚拙です。

でも色々と思い入れがある作品で、私自身がこのような「特別な力」といった作品が好きで、このような作品ばかり頭に浮かぶのです。その中でも上手くまとまった方のプロットを文章に起こした作品です、気に入る方いらっしゃるかな？

兎に角、あと二章で終わりです、続きが気になる方は読んで頂けると光栄です。

長々と独り言を吐かせて頂きました。

第四部

今までに何度朝を迎えただろう、十七年も生きていればかなりの数を迎えているに違いない。鳥のさえずりが心地よい、目覚まし時計のうるさい音も今日は鳴らない、こんなに爽快な気分で目を覚ましたのは数えられるほどしかない。

僕は一度大きく伸び、一気に身体を起こす。起きるときの苦が全くない、ここまで気分が良いと逆に悪いことが起きそうな気がする。なぜか人はそんなことを考えてしまう。

別に学校があるわけじゃない、このまま寝ていても良いのだが、昨晚風呂に入らなかったのはまずかった、何となく気持ち悪い。仕方ないのでとりあえずリビングに行くことにしよう。服もそのままだったのですぐに部屋を出て、階段を降りる。いつもは身体が重くて降りにくい階段も今日は軽快だ。

リビングのドアを開けるとそこには誰もいない、藍もしくは舞はまだ寝ているのだろう。誰もいないならすることも無い、今の内に風呂に入ろう。僕はリビングのドアを閉め、バスルームへ向かった。バスルームの鏡を見ると昨日頭を怪我したことを思い出す、包帯をほどくともう腫れも引いていて、痛みも全く感じない。大事に至らなくて良かった。そして僕は朝風呂と洒落込むことにした。

これ以上に気分が良いときは無い、朝の目覚めが最高、朝から風呂、次は何をしてやろうか。これ以上ない些細な贅沢を出来る限りしてみたいという気分になったが、ふと些細な贅沢って何だろうと考えると思いつかないのでやめた。

すぐにすることが無くなる、元から趣味が豊富とは言えない。休みだからといってすることも無い。そんなときは大抵ダラダラとテレビを見る。気分の良い日でもそれは変わらないのか……。

バスルームを出て、リビングへ戻る。

リビングに入ればすぐにテレビをつけて適当に面白そうな番組を探す。バラエティ、スポーツ、ニュースといった様々な番組がやっている、こんな時ははずれの少ないニュース番組を見るのが吉だ。

『昨日、午後九時頃、飛行機事故で生き残った秋月栄凛さんが殺害されていました』

——殺害？

『市内の某病院で午後九時頃、看護師によって見つけられました。被害者は体に叩かれた跡や突かれたような跡、えぐられた様な跡が多く残っており、所々肉片が飛び散っているという状況でした。警察が調査中ですが、証拠が全く無く、捜査が困難しています。視聴者の皆様に情報提供を呼びかけています、情報のある方は画面下に表示してある電話番号にご連絡ください、二十四時間受け付けています、多くの情報をお待ちしています。……次のニュースです』

——死んだ？ 栄凛が？ 何言ってるんだ？ 誤報だ、誤報に違いない、新聞を見れば分かる。

リビングを飛び出し、すぐに郵便受けの中に入っている新聞を取る。リビングで落ちて置いて読んでいる暇なんて無い、その場で三面記事の見出しを読む。

『飛行機事故の生き残り、何者かによって殺害、謎の死』

書かれていることはニュースで上手に要約されていた、栄凛が死んだなんて……舞が……殺したのか……。

「おはよー」

後ろには寝起きの藍が舞が居た。

「おはよう、今日は良い天気だな」

「そうだね、洗濯日和だよ。今日は優兄が洗濯担当ね」

このしゃべり方は藍だ。舞は藍の中か……

「新聞ならリビングで読みなよ、もっと優雅な朝を堪能しようよ」
そう言っただけはリビングに消えた。玄関で立っているわけにもいかない、僕もリビングへ戻る。

「今日は起きるの早いね。いつもは起こさないと昼まで寝てるくせ

に」

「体調が良いんだよ、今からフルマラソンでも走れるくらいな」

「なにそれー」

他愛もない会話、いつも藍は笑ってくれる。辛いときも無理に笑いを作る、悲しみから逃げるために。

「今度、また有紗と一緒にメシでも食べないか？」

舞と食事をしていた時の事を思い出し、藍に持ちかけてみる。

「お姉ちゃんまた来るの！？ 嬉しいな、今度は私もお料理手伝うね」

「じゃあ明日誘ってみるよ」

藍はやはり喜んだ、このままの流れで眼鏡を外させる。どうしても舞に聞くことがあるんだ。

「じゃあそのときにでも眼鏡買いに行こうか？」

「それ良いよ、優兄も良いこと言うなあ」

藍は満面の笑みで褒めてくれる、嬉しいことだが眼鏡を外してくれた方がもっと嬉しい。

「どんな眼鏡が欲しいんだ？」

「んー……似合うのなら何でも良いよ」

「それもそうだな、自分らしいのが一番だな」

ずっとずっと笑っている。眼鏡を外すチャンスが無い。——そう思っていると、藍が自ら眼鏡を外した。

「これも思い出が沢山詰まってるけど、これからの思い出を詰めるにはもう一杯だからね。本当に嬉しいよ」

しばらく藍は感傷に浸っている。だが、舞になる気配が無い……舞が出てこない。なぜだ、この前はすぐに気を失ったのに……どうして、舞が出てこない……。

「優兄どうしてぼーっとしてるの？」

「大丈夫だ、藍こそ大丈夫か？」

「いや、何言ってるか分からないよ？」

身体に異常は無いようだ。

「何か今日の優兄は変だよ、さつきも玄関にいたとき裸足で新聞読んでたし」

藍は話しながら眼鏡をかけ直す、これでもう舞に会える手段はカレーくらいしか残っていない。でも今からカレーを作るなんて奇怪過ぎる。

「今日の夕飯はカレーで良いか？」

「カレーはお姉ちゃんが来たときにしない？ みんなで食べるカレーは美味しいよ」

有紗が来たときにカレーか……それじゃあ遅い、最短でも明日だ。それに有紗が来たときに舞の姿を見られたら絶対に混乱してしまう。
「折角の客人をもてなすときにカレーじゃ物足りないだろ」

「そんなこと無いよ、お姉ちゃんだってこの前みたいに豪華な食事だと気を遣うでしょ」

「……それは無い」

有紗に遠慮なんて文字は無いと思う、いや絶対無い。

「そうかな？」

どっちにしても今日はカレーを作ることは許されない様だ、ならどうする、どうやって舞と接触する……。

「じゃあお姉ちゃんが来たときはカレーに決定だね。楽しみだな、美味しいカレー作ってね」

そう言つて藍はリビングを出て行った、僕はどうしたら良いか分からず床に身体を大の字にして寝る。

どうすればいい、何をしたらいい、栄凜が死んだ、舞が出てこない。

そう、舞が出てこないのが一番不可解だ。やっぱり栄凜関係なのだろうか、栄凜が死んだことなのだろうか。

だけど僕はそんなこと気にしてない、栄凜が殺されることを覚悟していた。何があっても舞には文句を言わないつもりだった、だから栄凜が死んだのは怒っていない。

でも、何で舞は僕に嘘を付いたのだろうか。しかも出てこない、

顔を合わせようとしなない。

「何でコソコソしてるんだよ……そんなの舞らしく無いだろ……」

つついっ独り言が漏れてしまっ、しかも愚痴。でもこの言葉は本性……僕の正直な気持ち。

もっこのまま眠ってしまいたいが爽快感が邪魔して何かしてないっと落ち着かない。

こんな時は何をしたらいいか分からない。何をするわけでもなくただ天井を見つめてる。

——ずっと、ずっと見つめていた。そしてゆっくりと視界が狭くなっていった。

どれくらい時間が経ったか、そんなことはどうでも良い。目を覚ますと目の前には藍がいた。

「優兄、起きて」

外は暗いのに僕の寝ているリビングは電気も点いてなく、薄暗い部屋の中で大の字のままだった。

「もう夜だよ、寝過ぎだよ」

「……ん？」

朝と同じく身体は簡単に起きあがる。

「やっと起きたよ、気持ちよさそうだからそのままにしてたらずっとな寝てたでしょ」

「多分ずっとな寝てた」

「明日からまた学校なんだから、休日くらい有効に使いなよ」

またいつもの生活が始まる、栄凛の件はもうこりごりだ、でも舞とのあの一時はずっとずっと続いて欲しかった。こんな事を考えられるんだ、僕の脳はもう働き始めている。

「仕方ない、今日のご飯は私が作ってあげよう」

無い胸を叩いて見栄を張る。藍の料理もなかなか美味い、素朴でいかにも母の味というヤツだ。

藍はキッチンに行った。冷蔵庫を開けて中身をチェックしている

姿が見える。

「何も無いよ……」

こっちに振り向き寂しい言葉を投げかけてくる。

「買いに行くか」

というより買う以外の方法がないだけでもある。近所のスーパーまで歩いて也十分かからない、手軽に行ける。外は暗いがまだこの時間なら営業中だ。

「私も行くよ」

藍が行くなら僕が行く必要は無いと思うのだが、この流れは多分一緒に行くと言うことだろう。

「じゃあ行こうか」

家計を支える財布を持ち、外に出て鍵をかける。

「久しぶりに二人で出かけるね」

「そうだな、藍と二人でどこかに行くなんて最近してないな」

確かに藍と一緒に出かけたのは久しかった。舞となら昨日出かけたばかり。

その後、別に会話もなかったただ薄暗い夜の道路をスーパーに向かって歩き続けた。

スーパーに着くと、人はまばらで店内に雑音が少ない、その上あらゆる商品に値引きのシールが貼ってあった。

「閉店間際だとこんなに安くなるんだな」

「そうだね、家に食材が無くて結果オーライだよ」

僕がカゴを持ち、藍の後ろについて行く形で店内を回る。そこまで大きくないのですぐに見て回れる。

「お総菜が安いね、これなら作らなくても良さそう」

そう言っただけだとカゴの中に商品を入れていく。

「結構買っただな」

「安いからいつもの倍買ってもほとんど同じ値段だよ」

「半額だからな」

カゴに入っているのはすべて半額の商品であって、定価の物や三割引止まりの商品は入れていない。

「節約上手な妹を持つて、優兄は幸せだね」

「ケチな妹の間違いだろ」

「意地悪なこと言っな」

そんなやりとりをしてる間にも、半額商品はカゴを占領していた。

「これで四日は何も買わなくても良さそうだね」

「賞味期限が……まあ食べれば問題ないだろ」

野菜と肉と総菜で飾られたカゴをレジに持って行く。

レジで待たされることなく会計が済み、すんなりと外へ出た。

「今度から買い物は夜行こうね。節約、節約」

半額が淒く気に入ったようで、スキップしそうな勢いで歩いている。

「でも総菜ばかりこんな買い方はこれで最後な」

少し納得のいかない顔をしているが、藍はうなずいた。

家に着くと、藍はすぐにキッチンに向かい調理を始めた。調理と言っても総菜を炒め直したり、サラダを作る程度なのだがそれでも栄養をとれる献立を考えている藍はしっかりしていると思う。

慌ただしく作業をしているようで、スリッパがフローリングに当たる音が鳴り響いている。

「手伝おうか？」

「大丈夫、すぐ終わるー」

返答の声を聞く限りそれほど忙しそうではない様なので、僕はリビングでただテレビをつけて待っていた。

待っている間は暇なものだ、特にやることもなくこんな時に限って面白い番組もやっていない。

「和室で待ってるよ」

くだらない番組を見ているくらいなら和室でくつろいでいた方が

良い。藍に準備を任せて僕は楽をさせてもらうことにしよう。

和室に置いてある刀を見るとあの日が自然と思い出される、ほんの少し舞と会っていないだけなのにとても心に空虚感が漂っている。なぜだろう、心が空っぽになったから脳みそも空っぽになってしまったのだろうか、どうも最近メンタル面が弱い。

僕は刀を取り、鞘から抜く。刀身はいつもと変わらない美しさを持っている。

「こんなに軽かったかな？」

つい口に出してしまうほど刀は軽かった、そして僕の手になじんでいた。見れば見るほど取り込まれていく、やはり舞に執着しているところがあるのだろう、こんなに人恋しいのは初めてかもしれない。この思いを生きている人間に残すんだ、やはり死人は最も罪が重い。

「料理出来たからドア開けて、重いんだから早くしてー」

藍が料理の準備を終えて和室に食事を運んできてくれたようだ。

「今開ける」

刀を戻し、和室と廊下を遮っているドアを開ける。

「半額でもこんなに美味しそうに出来てるんだよ！　ちよつとした手間を加えると料理は化けるんだよ」

「ちよつと変わった料理評論家の台詞みたいだな」

藍は冗談を交わしながら着々と配膳している。僕も少しは手伝うがそこまで大した作業ではないので、藍はしなくて良いよと言ってくれた。

「それじゃあ食べようか、私が頑張って作った料理は最高だよ」

「半額の総菜を炒め直したただけだよ」

炒め直したと言っても、なかなか美味しそうなのがある。僕は回鍋肉に箸を走らせる。

……これは美味しい、ピーマンを追加して量を増やしシャキシャキ感が残るくらいで火を止めている。

「――腕を上げたな」

「私の作り出す料理は優兄をもうならせる、これは私が料理人として認められた証拠！　そう、まさに私は料理の鉄……」

「一人で盛り上がったろ」

「ちゃんと最後まで聞いてよ！」

「どうせくだらない話だろ」

「くだらない話はご飯につきもの、言ってみればくだらない話は無くてはならないもの。そう、やはり私はアイアン……」

「確かにそうかもな」

大笑いをして藍の台詞を阻止する。

「だから聞いてよ！」

この笑いはただの妨害工作では無い。藍の言っていることは間違いないことに笑った。今まで何が足りなかったか、たった一言でそれに気づけた。

「それじゃあ、楽しく食べるために挨拶といきましょうか。お手を拝借」

藍はしきり直し、両手を胸の前で合わせる。

「いただきます」

美しい旋律がちゃぶ台を囲んだ。

夕食がこんなに盛り上がったのはとても久しい。楽しいからだろうか食が進む。「今日はよく食べるね」と藍に言われる位だ、それだけ暴飲暴食していたのだろう。

その後、僕は風呂に入り、自室に戻ってベッドに寝転がり天井を見ていた。

静かに、静かに、天井を見つめ。そのまま眠りに落ちていく。昼間と同じ様に。

*

またいつもの朝が始まった。

昨日と変わらず体は軽い、今ならフラメンコだってコサックダンスだってカポエラだって軽快に踊れる様な気もする。

いつもの準備をして、朝食のために一階に降りれば、和室の方から声が聞こえる。

「ご飯できてるから早く」

もう藍は準備万端の様で、僕のことを待っていた。

「遅い！ 早く食べよ」

「あつ……制服」

中学校の制服に身を包んでいた。

「今日からちゃんと学校行くよ、不良少女は卒業だよ」

まだ妙によそよしいが、藍が時間をかけて導いた答えなのだ、シヨックから立ち直る準備が着々進行中なのだろう。

「不良少女の兄なんて嫌だからな、休んだ分善意的な行動に善処しなさい」

「さー、いえっさー！」

敬礼、僕は笑いながら朝食を味わった。目玉焼きにトーストと牛乳といったオーソドックスなメニューだが、いつもの朝食より断然美味しかった。

朝食が終わればすぐに学校へ行く、高校は授業開始時間が遅めなので先に家を出るのは藍だ。中学指定の鞆に制服、これが本来の正装なのだ。

「それじゃ、いってきまーす」

大きな声で挨拶、自分に活を入れている様な気もした。時間に余裕のある僕は玄関まで見送ってやった。

僕も数十分したら家を出ることになる、今日は有紗を誘いパーティーだ。冷蔵庫の中身をチェックして足りない物は帰りにスーパーに寄って買い出ししてくることにしよう。

冷蔵庫の扉を開ける……ほとんど作れる物が無かった。昨日結構買ったのに、ほとんど総菜だったから仕方ないか。ニンジンだけはあったので、メモをとらない方が早かった。そんなことをしている間に時間になった。荷物を持ち外に出た。鍵も忘れずにかけて自転車で学校を目指した。

月曜日の学校には二種類の人間がいる。休みを有意義に使ってすつきりとした顔をして登校してくる人と、休みを有意義に使ったが使い方を間違えて気怠そうに登校する人。

僕のクラスでは前者が多かった。「おはよう」と言う声が頻繁に行き来している。そんな賑やかな中、僕が席に座ると有紗がやってきた。

「おはいよー」

朝の挨拶はいつの間にか地名に変わっていた。

「ついに日本語を忘れたか？」

「何だよつまんねー。優ちゃんはもつと華麗なツツコミの持ち主じゃないか、ちゃんとしてくれないと困るよ」

「いつから僕がツツコミになったんだよ」

「おいおい優ちゃんらしくないって、ここは『じゃあつつこんでやるよ』って言つて、私が『エロエロだね』って返すところでしょ？」

「朝から厳しいネタだな……」

爽快な朝から、一気に微妙なテンションへと変わる。

「こんな美人からエロエロなんて言葉を聞けるんだよ？ 優ちゃんもしかして……」

「大丈夫、健全だ。だがしかし美人が聞き捨てならない」

「美人だよ、校内人気トップは誰？ 校内美人ランキング一位は誰？ 校内付き合いたいランキング一位は誰？ 女子から尊敬する女子ランキング一位は誰？ 一億円のスマイルランキング一位は誰？」

「……有紗」

「こんな美人とお話できるなんて光栄だと思わないかな？」

「昔から仲良かっただろ、今更そんなこと思わないよ」

「さて、少々生意気なお言葉をいただいたので反撃しちゃおうかな」
にやりと不気味な笑みを浮かべ、目薬を取り出した。目薬の使い道なんてただ一つ、有紗は目に液体を垂らす。

「優ちゃん頑張ってね」

そう小さく一言つぶやき。少し大きめな声で泣き真似を始めた……
やばい！

「違うんだ！ 僕は何もしていない！」

もう遅かった、僕の隣で泣き真似をする有紗にみんなが注目している。そして有紗が一言。

「……ひどい」

そいつって有紗は床に膝をつく。注目の目が一気に殺意と変わる

……

「月森君が御堂さんを泣かせた……」

「優が有紗ちゃんを……な、泣かせた……」

「おい！ 違うって！」

弁解など有紗の涙の前では全くの皆無。

もう手遅れだった、クラス中の男子が僕を囲み、女子は有紗を保護した。

「何しやがった！ 白状しろ！」

「何もしてないって、有紗が嘘泣きをしているんだ、本当だって！」
もみくちやにされて誰も僕の言葉が耳に入っていない。倒れる形

になり、胸を圧迫され息苦しくなってきた。

「ちよっと、まで、死ぬ……」

「目のゴミとれたー」

僕の虫のような声は誰にも届かなかった。その代わり有紗の言葉がクラス中に響いた。

「御堂さん、目にゴミが入って泣いていたの？」

「そうなの、勘違いさせちゃってごめんね。男子もごめんね」

僕からは見えないが多分ウインクか投げキッスでもしているだろ

う。

「いや、俺たち月森と遊びたかったからちょうどよかったよ。むしろ御堂さんありがとう」

一人そう言えば、つられてみんなが「ありがとう」と声をそろえて言う。もう信用できる友人はこのクラスにはいない。

騒動はすぐに収まり、ちょうど良いタイミングで先生がやってきた。

「起立、礼」

今日の日直が挨拶をする。先生は連絡事項などを淡々と話している。そんなとき有紗と目があつた、有紗は満面の笑みでごめんねと合図をしてきた。有紗にからかわれるのも慣れたものだ、僕も有紗に笑みで返した。

*

一日の折り返し地点、昼休みになった。

「ちよつといいか？」

有紗に今日の都合を聞くためだ。

「朝はごめんね優ちゃん。それで何の用事？」

「たびたびで悪いけど、また夕飯食べにこないか？」

「藍ちゃんを良いように使って私とご飯食べたいんだね、予定なんて全然無いから問題無し」

「藍がやつと気持ちがいっしょかり固まってきたんだ」

「そうか無視か。まあ、でも藍ちゃん元気になったんだね。また元気なロリロリが見られるならなんとしても行かないとね」

藍が元気になった、それから舞が出てこなくなったんだな。何か関係あるだろうか？

「んーどしたの？ 人と話すときは目を見て話さないためだよ」

「ああ、ごめん」

つい舞のことを考えると他のことに思考が回らない。藍は元気を

取り戻したというのに、僕がこんな様子では一家を守ることが無理かもしれない。

「優ちゃんの家には何時に行けばいいの？」

「基本的にいつでもいいけど……夕食を作るから七時くらいは大丈夫か？」

「おっけー。それじゃあおやつは食べないで楽しみにしてるよ」

「おう、最高に美味しい料理作ってやるよ」

そう言っただけは廊下に出た。屋上に向かうためである。

屋上にはいつも通り誰もいない、コンクリに大の字で寝ころんで太陽に照らされながら考える。今日カレーを作れば舞は出てきてくれるだろうか、あのとき言った言葉本当なのだろうか、カレーにすべてがかかっている。

舞に会えるかもしれないというだけで、胸が高鳴るこの高揚感。

授業なんか受けていられそうにない。僕はこのまま何となく授業をサボろうと決めた。

屋上から空を見上げると地球が丸いことに気付き、驚かされる。

こんなに大きな地球に僕がちっぽけと大の字を作ったところで、誰も何とも思わないのだろうか……

僕は眠気に忠実に従った。

鳴り響くチャイムの音、日はまだ落ちていないから五限の授業が終わった頃だろう。僕は立ち上がり教室に戻ろうとした、だがそこには有紗がいた。

「授業をサボるなんて不良だね」

そう言っただけ僕に近づいてくる、長い髪の毛が風に靡かされている姿が太陽でライトアップされているようだ。

「そういう有紗だって授業抜け出したんだろ、同罪だ」

「だって屋上に行って帰ってこなかったんだもん、何かあったかなと思うちゃって」

「こんな平和な学校の何が心配なんだよ」

笑って返答をする。

「優ちゃん気が抜けてる様に見えたからね」

「といって僕のすぐ近くまで来ると、香水の香りだろうか柑橘系の香りが漂う。」

「あれ、香水つけてるのか？」

「……どして？」

「柑橘系の良い香りがしたからさ」

「有紗は首をかしげる動作をしてからコンクリに座り込んだ。」

「香水つけたっけな？ つけたような……つけてないような……」
「わざとらしく腕を組んで考えている、香水をつけたかどうかくらい覚えていないのだろうか。」

「そんなに悩むなよ、別に嫌なにおいってわけじゃないんだ」

「そうだね、こんなに天気も良いから私もお昼寝しよう」と

「両手を思い切り伸ばし、空と向かい合う様に空を見る。僕も立ちながら空を見上げた。」

「地球ってまんまるだよな……」

「誰に問いかける訳でなく、独り言の様にぼそっと口から漏れる様に言葉を発する。」

「僕もさっき同じことを思ったよ」

「それでさ、私たちって小さい存在だなと思ったでしょ」

「その通り、よくわかったな」

「そりゃ、幼なじみだからね」

「あまり関係ないが、今この時間だけはそれでも良いなと思える。」

「それからしばらくの間、風の音だけが僕らの鼓膜を振動させていた。」

「——優ちゃん」

「急に沈黙を破り有紗が話し出した。」

「悩みがあるならいつでも聞いてあげるからね、一人で抱え込むのは辛いこと、厳しいこと、悲しいこと。クラスでも体調は良さそう

なのに生気が抜けてるって言ってる子もいたよ……」

僕はそんなに追いつめられていたのだろうか、舞と一度話ができればそれで良い、たったそれだけのことで周囲が心配するようなことをしてしまったのか……

「優ちゃんは名前の通り優しいから、周りに相談しづらいと思うけど。相談しなければ周りがこうなるってことも考えてね、あまり人のこと悲しくさせちゃ駄目だよ」

有紗は優しく、いつも通りの口調で助言してくれた。僕の最も嫌いなことを僕自身がしているんだということ。

「それじゃあ。優ちゃんはもうちょっとここにいた方が良いよ」

空とのにらめっこを終わらせ、すっと立ち上がり何も言わず屋上を出て行く。

「——ありがとう」

僕の口から出たのは思っていたよりも小さな声だった、有紗に届く前に風でかき消されそうな本当に微細な声。

そんな声でも有紗には届いていたようで、振り向かず親指を立ててグッドの合図をくれた。

僕は本当に良い友人を持った、自分の過ちを気付かせてくれる友人。そしてそれを優しく包容してくれる……心の底から感謝と反省をしたい。

僕はその後、今までの軽率な行動をとっていたことを反省した。有紗にもクラスのみんなにも沢山の迷惑をかけてしまったのだ、これからの行動を改めなければならない。

とにかくこれからは舞に執着することをやめる、今夜カレーを食べに現れなかったらすべての出来事は夢にする。舞と出会ったことも、栄凛を殺したことも、あの楽しかった一時もすべて無かったことにする。

——今夜ですべて覚悟を決める。

*

チャイムが放課後になったことを告げ、校内の人々は帰宅したり部活に精を出している。僕は先生に見つからないように少し遅れて教室に戻る、教室には有紗がまだ残っていたので目で感謝の気持ち伝えておいた、多分伝わっただろう。先生と顔を合わせてもいけないので、すぐに学校を出てスーパーに向かった。

自転車ならスーパーはすぐに着く、前は閉店間際だったので安かったが、今はまだ夕方なので値引きシールは全く貼っていない。

僕はニンジン以外の食材を求め店内を歩き出した。

ジャガイモ、タマネギ、豚肉を力ゴに入れ、他に入れたら美味しそうな食材を探す。だが特に何も見つからなかったのでレトルトのルーの売り場へ足を運んだ。

「うわっ」

あまりに大量の種類について驚いてしまう。レトルトだけでもこれだけそろえているなんて……この店のオーナーはカレー好きと見て間違いないだろう。店主のことなどどうでも良い、問題は何を買うか、コクがまるやかなカレー、熟成させたようなカレー、リングコにハチミツを加えたようなカレーと様々な種類。もうどれも同じに見えてきた、適当にコクと熟成のやつを買うことにした。

僕は自然と辛口のルーを選んだ、あの時の食事が今でも忘れられないのだろう……だがそれも今日までだ。

レジには主婦が結構並んでいたが、それほど待たずにレジを終えた。後は家でこれらを調理すれば立派なカレーパーティーだ。

僕は店を出て我が家を目指した。

家に着いたのは六時半ちょうど、鍵が開いていたので藍はもうすでに帰ってきているのだろう。

「ただいま」

少し声を張って帰ってきたことを告げる。

「おかえりー」

二階にいるのだろう、小さな声が僕を出迎えてくれた。着替えるのが面倒なのでそのままキッチンに入って作業に移る。

キッチンで野菜を切り始めると、二階から降りてくる足音が聞こえ、もちろんのように藍がキッチンにやってくる。

「今日はお姉ちゃんくるんだよね？」

相づちを打ち肯定の意を伝えると、藍は喜んで近寄ってくる。

「私にも手伝えること無いの？」

「別に簡単だから良いよ」

カレーは簡単だからキャンプなどでも作られるのだ。

「えー、なんか手伝わせてよ」

あれ、また柑橘系の香りを嗅覚が嗅ぎとる。

「有紗が来るからって、オシャレでもしたのか？ そんなことしなくともいつも通り迎えればいいのに」

僕は笑ってやった、いつも通りになるために有紗を呼んだのだから、普段の格好で迎えてやった方が良い。

「別にオシャレなんてしてないよ？ 私はいつだっていつも通り」

「香水つけてない？」

「つけてないよ」

有紗と似ている香水かと思ったら、別につけていないのか……僕の気のせいかな。別に大したことではないので僕はカレー作りに集中することにした。

「お鍋準備するね」

僕が野菜を切っていると、藍は積極的に手伝ってくるので結局は二人で作ることになった。

心のどこかで藍が舞に変わってほしいという願望があった、僕はあの時の言葉をずっと信じていた。

鍋の中身がぐつぐつと煮え、見事にカレーの完成だ。

「うわー、シンプル……」

「何事にも気取っては駄目だ、物の本質を見抜きそれを生かす。それを難なくこなす人が国のトップになる！」

「熱弁したところで中身は変わらないよ……」

そうなのだ、具が素っ気ない。この一言に尽きる。

「仕方ないだろ、夏野菜カレーもシーフードカレーもこの時期は微妙、ならば王道という王道を貫いて見せようと考えただけだ」

「だから熱弁しても……」

「ごめん、適當すぎた」

素直に頭を下げることにした。

「本当だよ、せっかくお姉ちゃんが来てくれるのにこれは無いと思うよ……」

反論できない。前回はあれだけ豪華だったのに今回はカレーだけ、しかも王道カレー。楽しみにしていたようだし、これは怒られることを覚悟した方が良くかもしれない。

「ところでお姉ちゃんはいつ来るの？」

「一応七時に来てくれとは言っておいたけど、もうすぐ来るだろ」
時計は六時五十分を指しているので約束の時間までもう少しだ。

カレーは火にかけたまま、和室で食事ができるように炊飯器とカレー皿を運び、いつでも夕食を食べられる様になった。

そんなとき、リビングで電話の音が鳴り響く。

「もしもし？ ……あ、お姉ちゃんか、どしたの？」

有紗からの電話らしい、時間は後三分で七時になるというのに何で電話なんてしてくるのだろう。

「はい、優兄に替わるね」

僕に用事、もしかしてキャンセルだろうかと不安になる。藍から受話器を受け取る。

「もしもし、どうしたんだ？」

『それがね、藍ちゃんに復活おめでとうプレゼントをあげようと思つて、駅前のロシアンに買い物に行ったんだけど……』

「そこって怪しげな小物とか雑貨が多い店だろ、何でそんなのプレ

ゼントするんだよ」

一度行ったことがあるが、脳みそキーホルダーや動物の死骸をモチーフにしたアクセサリーなどが多く取り扱っていて、店員は全員ゴスロリ風の制服を着用しているという、とにかく変な店だった。

『最近新しい物が入荷されてね、結構人気出てきたよ、昔は近寄りたたいお店だったのにね。それより本題なんだけど、ロシアンで買った可愛いぬいぐるみが多すぎて運ぶのに苦労してるのよ、そこで男の子の優ちゃんにヘルプミールコールをしたってわけ』

「多すぎるって……どれくらい買ったんだよ？」

『大きな袋にいっぱい』

「それくらいだったら有紗一人でも……」

『それを三つ』

電話越しにため息が出る。

「どうしてそんなに？」

『私の分も入ってるもん、全種類集めてるからさ』

有紗が全部集めるということは、ロシアンのオリジナルグッズなのだろうか。昔から限定とかオリジナルに目がなかったからな。

「とりあえず状況は分かった、どこに行けばいい？」

『駅から優ちゃんの家に行く途中にある公園、結構用具が充実してる所』

「あそこか、分かった。すぐ行くよ」

『あいーよろしくー』

電話を切り、受話器を元に戻してから藍に有紗を迎えに行つてくると告げる。ただ荷物持ちがほしいだけの様なので、手ぶらで家を出た。

公園まではそう遠く無いし、自転車で行っても荷物を運ぶことに適していない。だから僕はそれほど暗くない夜を一人歩いていた。月が綺麗に街を照らす、街灯の明かりなど電力の無駄遣いにしかすぎない。そして涼しい夜風が何とも心地よい。

「結局舞には会えなかったか……」

一人愚痴をこぼした、夜の雰囲気が僕を素直にさせてくれたのだろつ。

しばらく歩くと公園に着く、辺りを見回すとベンチに腰掛けている有紗がいた。

「おい、来たぞ」

歩み寄るとベンチの上に大量のぬいぐるみが詰まっているであろう大きな紙袋が置いてあった。

「これか……」

「うん、ご苦労ご苦労。私はまだちょっと疲れてるから休憩、優ちやんも座りなよ」

言われるままにベンチに座る、公園にも街灯があつて月明かりだけを見ることができず少し悲しかった。

「何でこんなにいっぱい……全部ぬいぐるみなのか？」

「そう、全部ぬいぐるみ。『ロシアンズ』の新作が出ててつい買っちゃった」

有紗は嬉しそうにロシアンズについて語り出す。

「最新作は兎がモデルでね、このナース服を着て包帯でぐるぐる巻きにされてる兎なんて超可愛い！ 他には軍人風兎、迷彩服でライフルを装備してるところが格好いいの」

珍しく乙女チックな表情で袋からお気に入りの人形を出している。

「ロシアンズは種類が少ないから私が個人的に買ったの、藍ちゃんへのプレゼントは別物」

そう言つて他の袋を開け、中から大きいぬいぐるみの顔だけ出す。

「これが本命、おっきなクマ。このクマはね、ロシアンズの初期販売の中で一番人気があつたからサイズを大きくして商品にしたの。

結構高いんだからね」

「丁寧に説明ありがとうございます」

確かに脳みそよりは可愛い、だが斧や銃を持っていたり、血のにじんだ包帯を身につけている様なぬいぐるみはやっぱり少し趣向が

変わっている。だが贈り物はどんな物でも気持ちがかもっていれば喜ばれる、有紗には強いメッセージの様な気持ちがこもっているの
で大丈夫だろう。

「僕には女の子の喜ぶプレゼントなんて分からないから助かったよ、
本当に感謝してる」

「そんなのいいって」

有紗は笑いながら、手をパタパタさせて気にしていないという動作をとる。

「あともう一つ言うことがあってね、今日屋上で香水の話になった
でしょ？ あれ今でも気にしてる？」

藍もあの香水と似たような香りがした、気にしてないと言ったら
嘘になるだろう。

「少しは気になるよ、何となくだけど隠してる様な気もしたからな」

「ははっ……そうだよ、私は嘘が下手だな」

少し自嘲気味な薄笑いをした。

「実は……香水をつけてることが気付かれないと願いが叶うってキ
ヤッチフレーズで有名なブランドなんだ」

だから少し挙動不審だった、理由が分かればどうして有紗と藍が
あんな態度をとったか分かる。

「だから藍も知らないふりをしたのか、販売会社もおもしろいこと
を考えたな」

女子はおまじないなどの部類が好きなんだな、高校生になってか
らはそんな話は聞かなかったけど意外といえるのかもしれない。

「あれ？」

有紗は黙り込んでる。

「願いが叶わないくらいでそんなに落ち込むなよ」

軽い口調で言ったことが気に触れたのだろうか、まだ有紗は黙り
込んでる。

「ごめん、なんか悪いこと言っちゃったな。今度有紗にお返しする
よ、ぬいぐるみでも何でも買っよ。そう落ち込むなって」

有紗の目から自然と涙が流れ、目は溜まっていた涙で潤んでいる。
「大好きなの！」

こんなにくしゃくしゃの顔なのに有紗は笑った……なぜか心に針が刺さったようにちくちくと痛くなる。

「……優ちゃんは……私のこと……好き？」

「好き……だよ」

「でも、恋愛の意味では無いよね。分かってるよ、でも言わなきゃやってられないの……」

有紗の言うとおり、有紗を恋愛対象として見たことは無かった。

「……ごめんね、もう暴れないから……」

でも、固く繋いだ手を離そうとはしなかった。顔はずっとうつむいて、しゃっくり混じりの鳴咽が静かな夜を悲しい夜へ変貌させた。

ガバツと顔を上げ、繋いだ手を離して涙を拭う。そうすると落ち着いた表情の有紗がいた。

「うん、これでケジメがついた」

「ケジメ？」

有紗の表情は少しずつ冷淡に変わっていく。

「そう、優ちゃん。今から冗談抜きで難しい話をするよ」

「なんか変だぞ？ 落ち着いたなら説明してくれ、どうして急に泣き崩れたりしたんだ」

さっきまでの混乱状態は見る影も無く、硬い表情で声もトーンが下がっている様に聞こえる。

「さっき、藍ちゃんから私と同じ様な香りがするって言ったよね？

それは能力者から放たれる独自のオーラの一つ」

「能力者って……」

「そう、私は舞と一緒にの能力者……」

有紗の口から能力者なんて聞くとは思わなかった、まして舞という単語が出てくるとは予想もしていなかった。

「……舞を知ってるのか？」

「能力者で知らない人の方が少ないくらいの人気者。人情に弱く、その弱点を逆手にとつて殺すが、殺しても殺しても何度でも蘇る悪魔。人によつては神とあがめる人もいるくらい極端な存在」

「舞はそんなに凄かったのか……」

僕は会いたいという欲求が激しくなる、人というのは不思議なことに自然と惹かれていくのだ、まさに今僕は知識を探訪する探検家の様だ。

「ということは有紗も能力が使えるのか……」

有紗は僕を殺すつもりだと直感的に分かった。

「生まれ持った能力者では無い、人間実験で開発された能力。栄凜の能力開発実験によつて才能を開花した一人」

「栄凜も知っているのか……」

「栄凜は私のことをアテナと呼ぶ、栄凜は私を最強と言う、たった一人だけ私を神と崇める」

病院で言っていたアテナとは有紗のことだったのか、最強の能力と豪語していた。舞でも勝てないくらい凄い能力なのだろうか……舞は出てこないし、僕の死は決定したようなものだ。

「僕を……殺すんだろ？」

頷いた。

「僕に……能力を使うんだろ？」

頷いた。

「僕は……悲しませたんだな？」

頷いた。

「ごめんな、気付いてやれなくて」

有紗は僕に歩み寄つて、僕の頭を両手で固定する。首でも捻るのだろうか、落ち着いて考える辺りが僕らしいなと自嘲した。

「私の能力は悲しみが生んだ。子供の頃栄凜が家にやってきた、大量のお金を置いて私を連れて行った。今でもあのときを思い出すと私は恐くなる、誰も助けってくれなかったあの時を……」

「有紗の両親は？」

「栄凛の部下に気絶させられたの、お金と一緒に脅迫状が置いてあって。情報が漏れたら私を殺すと書かれていた、最初はもちろん警察に電話しようとしたそうだけど、見張りの部下に能力を見せつけられて口封じをされたの、もう従うしかなかった……今でも両親は私のお願いは全部聞いてくれる、それくらい自分たちの過ちを認めている、でも私から普通に生活しようと言って今じゃこの話題はタブーだよ」

なんと返事をして良いのか分からず、僕は何も言わなかった。

「研究所は酷かった、精神的ストレスで頭がおかしくなっている子をいっぱい見た。私はただ怒りと悲しみだけを心にためて、ずっと解放される時を待った……そして、この能力が生まれたの」

有紗の唇が僕の唇に接触した。近づく時に目を閉じ、何とも可愛い動作に僕は見とれていた。つまり……キスだった。

「……え？」

「苦しまないようにすぐに殺してあげる、優ちゃんは知らなくて良いことを知りすぎた、知るべき必要のないことを知っていると今後の人生どんなにあがいても幸せになれない、それなら早く死んだ方が良い……」

紙袋の中からぬいぐるみが一匹、二匹と次々に出てくる。きちんと自らの足で地を踏み、足下まで来ると僕の足を掴む。

ぬいぐるみが足を掴んだことを確認して、有紗は一番大きなクマのぬいぐるみを持って僕の手の届かない所に離れた。

「悲しいとき、そばにいたのはぬいぐるみ。私の怒りと悲しみを救ってくれたのはぬいぐるみ。特にこのクマに似てた、藍ちゃんにあげたら絶対喜ぶと思った。悲しいときにはぬいぐるみを抱いて寝るのが最高に落ち着くの。でっかいぬいぐるみ……それが私の能力。優ちゃんを殺して、悲しみのクマさん……」

ぬいぐるみにキスをするとき大きなクマが立ち上がる。キスした物でキスした者に攻撃するのだろうか。

「優ちゃん、その小さい子たちでも足なんて動かないでしょ、能力

は気持ちに左右されるの、それだけ私の気持ちは強いってこと」

——死ぬ、僕はここで死ぬのだ。周りの人々に悲しみを与え、それに気付かせてくれた有紗を悲しみに包み、ここまで悩ませた。一番人にしてはならないことをした、殺されて当然だ。当然か……最後に舞に会いたかったが無理だろう、今頃美味しく煮えたカレーの匂いが我が家を包んでいるのだろう。あの時の笑顔、一緒に過ごした時間。脳に刻み込まれている。

「やっぱり、舞が好き……」

僕は有紗の反応が見たくないので目を閉じた。まぶた越しに月明かり、冥土の土産はこれで良い。

「——だから優ちゃんのことを好きなんだよ」

何で今更有紗はそんなことを言っているのだろうか？

「やっぱり、一筋縄でいかない。恋もそうだったからもう慣れっただ」

つまり邪魔が入った、とてつもなく悪質な邪魔が……。

「——言ったよな、夕飯がカレーだったら何が何でも出てくるって聞き覚えのある声。

「でも、あのカレーは王道にもほどがあるだろ」

カレーにはうるさい。

「愛の告白なんてされちゃったの初めてだよ」

聞かれていたのか……だが、生涯初めての告白が舞でよかった。

「……もう会えないかと思ってた」

「もう会うつつもりなんて無かった」

ぶっきらばうに吐く台詞が懐かしい。

徐々に近づいてくる足音、同時に自然とまぶたが軽くなる。

うつすらと開いた目から見えるのは大きなクマと有紗の姿、大きなクマの拳が僕の鼻先すれすれで止まっている。小さなぬいぐるみでさえ、これほどの力があるんだ、ましてそれより大きいぬいぐるみなら僕の頭はボールのように飛んでいってしまっただろう。

舞が有紗の目の前まで歩み寄る、僕からは後ろ姿しか見えない。
「優に酷いことするなよ、悲しむのはお前もだろ。ミドーナンの木偶」

「栄凜か……余計なことを……」

舞は居合い抜きができるように常に刀に手を添えている、だが有紗は戦闘の術が無いのだろうか、それとも舞を恐れていないのか堂々としている。

「さて、木偶がアタシに勝てるかな？」

「別に舞に勝利するつもりはないよ、ただ刀を抜いた瞬間に優ちゃんの頭を吹き飛ばす」

「あはっ、所詮木偶は木偶でしか無かったな。何で栄凜もこんなやつにすべてを託したのか分からないよ」

「それは勝手に栄凜がしたこと、私には関係ない！ どれだけ辛かったか！ どれだけ苦しかったか！ 能力に対する異常な執念が生んだ歪んだ心、ミドーナンなんてもう一生聞きたくなかった……」

また僕の知らない単語『ミドーナン』おそらくミドーは有紗の名字、『御堂』が由来だろう。有紗と栄凜が研究所で何かあったことは何となく分かった、栄凜が有紗に溺愛していたのだろう、病室でアテナと言っていたから間違いないそうだろう。

「殺しの依頼を受けたのは研究所を出てすぐだったな」

「ずっと願いが叶うのを待っていた。仕事が迅速で有名だったのに、私の依頼はずっと叶わなかった。挙げ句の果てに始末をしないなんて酷すぎる！」

「始末をしないって、話が繋がらない……」

舞は栄凜を殺さなかったという意味にとらえられる。殺していないのならなぜ僕の前に出てこなかったんだ、てっきり僕に嘘をついたから顔を合わせづらいのだと思っていたのに……違うのか？

「アタシは栄凜を殺してない、殺したのはこの木偶だ」

「優ちゃん……嫌いになった？ 私が栄凜を殺したの、許せなかった」

た……人生を壊した栄凜が許せなかったの……」

死とか殺すとかは聞き飽きた、殺される人には何らかの罪がある。有紗がどれだけの苦痛を受けたのなんて僕には到底分からないだろ、だが僕は間違いなく有紗を悲しませた、ならばあの時僕が殺せと言っていたら……そう考えると僕はまた罪の意識に押しつぶされそうになる。

「嫌いになるわけが無い……やっぱり僕がすべて悪いんだ……」

「優ちゃんは悪くない！全部舞が悪い、みんなのことを救ってきただのに私だけ救ってくれなかった……」

「仕方ないだろ、木偶の言うことより優の方が大事だ。こんなに美味いカレーは食べられないぞ」

「巫山戯ないで！藍ちゃんの身体じゃ無かったら、今頃生ゴミになつてるところだ」

何でこの二人は仲良くできないのだろうか……。

「アタシと戦って勝てるでも言うのか？一番相性が悪い能力だぞ？戦略も策略も無い木偶に勝てるわけが無い！」

「やらなければ分からない……策略の一つくらい持つてる」

互いが互いを罵り、殺し合う……そんなことになるなんて思ってもいなかった……。

「木偶には荷が重いぞ、自分の身体を大切にしろよ」

「もう私の居場所が無いこんな所に未練なんて無い！」

「……優を試してみろ」

舞が僕を見ると促す、僕がどうかしているのか？有紗が僕を見て驚き、すぐに舞と向き合う形に戻る。

「な、何でこうなっちゃったの……」

「だからアタシは二度と会わないと決めていた、木偶も木偶の坊らしくいつも通りの生活をしていればよかったんだ。どこで弾倉を込めたのか……もう暴発寸前だ」

何だろ……身体が熱い。

「ど、どっ……」

声が出ない。喉の奥に何か詰まっているように苦しい、鼓動が高鳴り、血の流れを感じることが出来る。

「さて、暴発よりは引き金を引いた方がまっすぐ弾丸が飛ぶ。どうする？ どちらを望む？」

「共同戦線なんて……」

「優に対する愛情が足りないようだ。本当に好きなら、本当に愛しているならここですることは一つしかないはずだ」

だから何を言っているのか分からない……有紗が小さく頷いている、舞振り向きこちらを見る。

「優、楽になれ」

身体が軽いを通り越して、身体に重みを感じない。僕には重力が働かないのだろうか、少し空が近くに感じた。

目の前には、刀を抜いた舞とぬいぐるみに囲まれた有紗が立っていた。舞はいつものぐるぐるとした気持ち悪い目で僕を睨む、有紗は心配そうに怯えた様な印象を覚えるが意志ははっきりしていそうだ。

「さて、桜の生まれ変わりはどれだけの力か……」

「これがゼウス……」

二人の声はしっかりと聞こえる、だが歩くことも言葉を発することもできない。ただ視覚と聴覚が働いているだけ、それ以外の感覚は何も無い。

「桜は能力をコントロールすることができたが優には難しいだろう。何が起きるか分からない、そのときはできるだけ距離をとって対応しろ」

「そもそも近付くと思えない……」

（僕が、能力を使っている？）

「あはっ、優には言葉が届いているようだ、声に反応して形を変えやがった」

「優ちゃん、落ち着いて！ 今助けてあげるから！」

助けるって言われても、さっぱり状況が把握できていない。刀を持った兎のぬいぐるみが僕の方へ向かって歩いてくる。よちよちと僕の足下に来ると、持った刀で僕の足を斬りつける。痛みが全く感じられない。

「あはっ、一体で何ができる？ 全部飛びつかせても無意味だよ」
舞が有紗を煽る。

（いい加減仲良くしてくれ、二人とも僕の大切な人なのだから……
傷つけあうなんて見たくない）

僕の周りにぬいぐるみが溢れかえる、僕のことを殴っている人形もいれば、武器を使うぬいぐるみもいる。だが痛みは感じない……ただ人形劇を見ている様な感覚、なぜか悲しい茶番劇を見ているように悲しくなった。

「逆効果だ！ 離れないと喰われるぞ！」

「そんなこと言われたって！ 何であんなあり得ないことになってるの！」

「優の能力の形が見えてきた、木偶でもたまには役に立つ」

「優ちゃんが戻ったら本気で殺す！」

（だから二人とも落ち付け……もう喧嘩は止めてカレーパーティーしようぜ）

僕の願いは通じるのだろうか、気持ちを伝えることができない不甲斐なさに僕自身を恨んだ。

「タイプが違うだけか……」

舞の大きな独り言に有紗は首を傾げている。

「さて、やっぱりアタシがやるしか無いわけだ」

舞はそう言いながら軽い準備運動の様に、身体の筋をのばす運動をしている。

「能力者つてのは、精神的な部分が能力に影響される。意志が強ければ強いほど強力な力を生む、逆に意志が弱ければ力が無くなる。つまり、能力の源を断ち切れば良い、だからアタシが優を斬り殺す。悲しみをすべてアタシがもらってあげよう」

舞は有紗に手を振る。そして一気に僕との間合いを詰めて刀を抜く。

「アタシに斬れないモノは無い、アタシは優の悲しみを断ち切つてやる！」

刀は僕の首を狙っている。反射的に危険を感じて後ろ下がる。

——そう、後ろに下がれたのだ。僕のコントロールしている部位が増えた、足を動かせるどころか手まで動くようになってる。

「それで良い……ついに覚醒したか」

次第に身体の束縛は解けていった、感覚が戻ってぬいぐるみに斬られたと思われる足に痛みが走った。

その痛みがさらに束縛を解く、ついには匂いを嗅ぎ取れる様になり、血生臭い匂いが僕の鼻を襲った。

「優ちゃんが悶えてる、何をしたの？」

「さっきの一撃が優の覚醒を決め手になった……これから最強の化け物になるよ」

徐々に身体に感覚が戻ってくる、自分の腕を見ると筋肉が増強し、腕がはち切れそうなくらい膨張していた。

（なんだよこれ？ どうして僕の身体がこんな風に……）

脈の流れが速い……いや、速いなどといったレベルでは無い、常識の範疇を超えた速さ。ドクドクと流れる血、浮き上がる血管。もう僕は人間の形をしていないのかもしれない。

「優はずっと悲しんでいた、それが今解き放たれただけ……」

舞と目があった。気持ち悪い目が僕を睨み……挑発する。

「ちっ！」

手が勝手に舞を殴っていた。けれど舞は守ろうとせず、刀で僕の二の腕を切り落として空を切らせた。

腕を切り落とされても痛みは感じなかった、ただ単に切り落とされただけ、痛みを与えるような切り方をしていないからだろっ。

だが両断面から細い糸のようなものがゆっくりと伸びて、糸と糸が互いに絡まるように結びつき僕の腕は元通りになった。

「だからゼウスは最強」

「再生能力まで一緒か……」

暴走した僕の意志はまた舞に殴りかかり、同じように切り落とされ空を切る。片方を失ってももう片方の左腕で舞を狙う。だが結果は同じ、片方が切り落とされる頃にはまた腕は元通りになり、ただ単調な作業の様に殴り続ける。

「面倒だな」

舞の刀を振る速さが増した。僕の腕を千切りにするように何度も何度も切りつけ、再生するまでの時間を延ばした。

「断面にぬいぐるみを入れる！」

何もできず傍観者だった有紗に命令をしている。すぐにぬいぐるみは僕の腕に張り付き、再生の邪魔をする。

「これで良い？」

「今から動きを止めるぞ」

舞を殴ってもきりが無いと思い、僕の身体は有紗めがけて走った。たった数メートルの距離などすぐに間合いを詰められる。だがそこに舞の邪魔が入る。

「できるだけ離れる！」

左足首を斬られ、バランスを崩してそのまま勢いよく地面に倒れ込む。

「油断するな、死ぬぞ」

「分かっている！」

足首にもぬいぐるみがくつつき思うように動けない。右腕もまだ復活していない……そこに舞の刀が容赦なく僕を斬りつけた。

「少し大人しくしろ」

僕の全身を細かく分解するように切れ目をいれられ、腹部に蹴りをくらう。さっきの様に切り落とされるだけなら痛みは無いが肉片が飛んでいくところを見ると痛みがある。

このままでは殺されてしまう！　だが逃げようにも手も足も分裂しているので何もできない、再生するのを気長に待っていたら遅す

ぎる。

そこに大量のぬいぐるみが断面部分に張り付き、さらに追い打ちをかける。

（殺されてたまるか！ 幸せな日々を送る、もう一度みんなの笑顔が見たいだけなんだ……）

「苦しんでる！ 今のうちにとどめを！」

「苦しんで無いよ……悲しんでいるんだ……」

僕から逃げるように舞が遠ざかっていく、僕の身体は追いかけてよとすることが動かない……力がもつとあれば、そう強く願った。

「後ろ！」

有紗が叫んだときは遅かった、一気に舞まで距離を詰め、そのまま倒れ込むようなタックルで舞の脚を掴む。

「――優はこんなやつじゃなかった」

舞は身動きができないのに焦りも動揺も見せずただ口を開いた。

「優しくて、料理上手、何かあったときは力になるいい男だったよ

……」

小さく舞の声に嗚咽が混じっている。

「それが今はどうだ？ 強がって結局自分を責める、もつと自分に素直になれよ……桜が死んでからずっと悲しかったんだろ？ その木偶なら分かるだろう、自分以上にお前を愛していたのだから、お前が見るに堪えない姿になってしまったから殺したくなっただろうな。……アタシも優を殺してやりたいよ、そんな優は見たくない」

僕が悲しんでいる……ずっと強がって悲しみを煙に巻いていた……

……舞はそう言った。

「泣いているのは一人じゃない、アタシもその木偶も泣いている……」

有紗を見ると顔も隠さずにぼろぼろと涙をこぼして泣いている、今日で泣かせたのは二回目になるのか……。

「ごめんね、私どうにか元気になってほしかったの……でも駄目だ

った、屋上で殺していれば良かった、藍ちゃんの話聞く前だった
らもつとすんなり殺せたのに……」

僕はいつから周りに迷惑をかけていたのだろう……。

「藍ちゃんも気付いてたよ、この前遊びに行ったときに心配そうに
相談してきたから……もつと早く何とかしてあげられればこんな風
にならなかったのに……」

「妹さんは相当悩んでいた、だから私が取り憑くことができた。桜
のことが気になっていたのかと思っていたら違っていた、優への心
配の方が強かった。毎晩苦しそうにしていたからな……」

みんな僕のことを……。

目頭が熱くなる、今まで溜まっていた涙がダムを解放した様に流
れ出した。

「……アタシがその能力を消してやる」

舞を掴む手を放し、僕は一人涙を流し。その間に舞は立ち上がり
僕を見下ろす。

「——悲しみは全部アタシがもらってあげる」

声を出して感謝したい……「ごめん」では無く「ありがとう」と
言いたい。

「アタシが斬るのは悲しみ、優は斬らない」

「そんなことできるわけ無い！」

「まあ見てろって、アタシの優に対する思いの力は半端じゃない……
…よっ！」

——さよなら。

涙が一粒こぼれ落ちる……。

さよなら？ さよならってなんだよ……。

——刀が振り下ろされ、意識が飛んだ。

第四部（後書き）

次回最終話です、ここまで読んでくださった方がいらっしやったら最後まで読んで頂けると嬉しいです。

最終章

あの夜、また気絶をしてしまった。だが生きているということは舞は僕の悲しみだけを斬ってくれたに違いない。

腕を持ち上げるとそこには見慣れた両腕、血管も筋肉も正常できちんと動く。身体は重たかったが寝起きだからだろう。

まだ脳が寝ていたいと訴えている、遅刻でも何でもしる僕はもう一度目を閉じて夢の世界を旅する。

階段を駆け上がる音、スリッパの音と混じりドタドタパタパタと朝から愉快的な音が耳に届く。

「ぐっもーにん！ 起きろ、脱がすぞ、見るぞ！ それが嫌なら起きろ！」

ドアを開けて入ってきたのは有紗、なぜ有紗が僕の家で、しかも制服にエプロン着用して何しているんだ？

「早く起きて、朝ご飯冷めるでしょ」

無理矢理僕の身体を起こし、部屋を出て行った。仕方なく僕も起きるしかない。

面倒だったので制服には着替えず、そのままリビングに入る。

「おはよーやっと起きた。優ちゃんっていつもこんなだらしがないの？」

「優兄は気分屋だからなあ、私が起こしたり起こされたりまちまちだよ」

「朝から僕の悪口か？」

二人とも首を横に振って笑った。

「和室のちゃぶ台……」

「こっちに移したの、朝食運ぶの面倒でね」

ちゃぶ台は和室にあるからこそ趣が出るというのに、これでは和洋折衷の悪いお手本だ。

「とにかく食べちゃって」

藍に急かされたのでとりあえず床に座りちゃぶ台を囲む。

「今日はお姉ちゃんが作ったんだよ、いつもとは少し違って新鮮で美味しいよ」

メニユーは定番の目玉焼きにご飯とみそ汁、質素だが朝はこれくらいがちょうど良い。みそ汁は我が家伝統のみそ汁とは違い、具沢山で少し濃いめの味になっている。

「美味しい？ 美味しいって言わなかったら怒るよ」

「なかなか」

「朝から捻くれてるな」

朝食に華がある、何とも微笑ましい朝の風景だろう。

「そうだ、大事な話があるんだよ」

有紗の言葉に藍が頷いている。何か悪い予感がする。

「今日からここに泊まるね」

「は？」

思わず口から漏れた素直な言葉、なぜ有紗がここに泊まる必要があるんだ？

「いや、藍ちゃんが寂しい寂しいって私に泣きついてくるから……」

仕方なく？

「ちょ！」

有紗の右手が藍の口をふさぐ。

「そんなわけで今日からどれくらいになるか分からないけどよろしく！一緒に登校だつてさ、ゲームとか漫画の世界でしかあり得ないと思ってたよ。嬉しいな、こんなチャンス一生に一回あれば良い方だよ」

藍は口をもごもごしながら「ふお、ふおぐ」と解読不可能な言葉を発していた。

「おつと時間だ、中学生は登校の時間だ。本当なら私たちも一緒に行きたいけど、お姉様の愛の時間を邪魔されたくないからね」

そう言つて藍を玄関まで運んでいった。

「寂しいなんて言っていないぞ！」

玄関からは虚しい遠吠えが聞こえたがすぐに治まり玄関が出る音がした。それを見送り有紗が戻ってきた。

「さて、もつともつと大事なお話だよ」

「やっぱりそうだよな……」

有紗の目つきが変わる、僕も箸を置き姿勢を正した。

「昨日の夜、どこまで覚えてる？」

「舞が僕を一刀両断しようとしたところまでは大体覚えてる」

「じゃあ、私が能力者で栄凜を殺した犯人で、優ちゃんを殺そうとしていたことも全部覚えてるんだね……」

改めて聞きたく無かったがこれは事実、僕は頷き覚えているというのを伝える。

「あの子の話をするよ……」

固唾を飲む。

「結果から言うと優ちゃんの暴走した能力を止めることに成功した。本当に凄かった、舞の刀が優ちゃんの頭の上で止まったんだ、それを何とか振り下ろそうとしている舞の姿は見るに堪えなかったよ……歯を食いしばって涙と鼻水で顔はぐしゃぐしゃ、でも必死に優ちゃんを守りきった。そう、守りきって舞はいなくなった……」

「いなくなっただって……」

「優ちゃんの身体が元に戻って、舞に近付いたとき、すでに藍ちゃんに戻ってた。能力者独特のオーラが消えていた……」

「つまりもう舞はいないのか？」

「少なくとも藍ちゃんの身体にはもういない、ちなみに優ちゃんからもオーラは消えてたよ」

僕に能力が無くなるのは良い、けど舞にもう会えないと思うとやはり少し悲しい気持ちになる。

「ちなみに、私も能力が無くなったの」

「何で有紗まで？」

「もう優ちゃんを守る必要が無くなったからだと思う、この能力はずっと優ちゃんの為だけに使ったための能力だった。でも周りに憎い人も危ない人もいなくなった、安心して気を抜いたらもうぬいぐるみは動かなくなってたよ」

栄凜も舞もいなくなれば、有紗にとって僕と関係のある能力者は誰もいなくなる、有紗は有紗なりに答えに行き着いたのだらう。

「でも別に関係ないよ、能力なんて使えない方が幸せだもん。私はむしろ無くなって良かった、優ちゃんが狙われる心配も無くなったから、もう最高！」

本当に嬉しそうに笑う、僕も喜ぶべきなのだらう。死ぬこともなければ、有紗と藍の三人で暮らせる。これほどの幸せは無いだらう。でもあの瞳が目に焼き付いて離れない。

「……やっぱり舞に会いたいのか？」

「会いたくないって言ったら嘘になる……」

「私も藍ちゃんもあれだけ頑張った……それでもやっぱり駄目なの？」

あくまでも強くは言わなかった、静かに僕の本当の心に問いかけるように有紗は聞く。

——しばらくの間有紗は言葉を発しようとせず、ただ静かに僕の返事を待っていた。これだけ時間をもらっているのにまだ気持ちが揺らいでいる……。

「そうだな……」

やっと気持ちを整理できた。

「もう舞には会えない、確かにそれは嫌だが会えない人を思っても無駄……そう、無駄だ」

自分でこの言葉を発するのにどれだけの勇気と時間がかかっただらう。

「今までのことは無し、全部リセットしてやり直す！」
もうここまで出たら後には引けない。

「今日からは新しい人生を共に送るぞ！」

有紗の目には涙、僕の目にも涙。やっと元に戻る、もう誰も悲しませない。

——この出来事を忘れず、この世から悲しみを消すと誓った。

「優ちゃん！」

有紗が僕に抱きついてくる。

「ずっと、ずっと優ちゃんのままでいてね……」

「本当に今まで悪かったよ、あの夜の約束覚えてるか？ 今度プレゼントするよ」

だが有紗は首を横に振る。

「これが一番のプレゼント、ありがとう優ちゃん……」

有紗が無性に可愛く思えて、ついつい抱きしめてしまう。

「……本当のキス……して？」

目を瞑り、僕の返事を期待している。この顔がまた可愛い、これで良いんだ。

——これが僕の望んだこと。

（アタシという女を差し置いてこの木偶と接吻か！ 見てないとも思ったか？ 身体奪って切腹するぞ？）

「え？」

「ん？」

頭の中からハスキーな声が聞こえる。

（早く離れる！）

「あ、はい」

怒鳴り声が聞こえる。いや、ここでは聞こえるというより感じるの方が近い感覚。

「優ちゃんどうしたの？」

「いや、ちよつと……」

もしかしたらもしかする。

「舞？」

（ご名答、とりあえずお詫びとして今日の夕飯はカレーで頼む）

面倒なことになったものだ。

「有紗、よく聞け……」

僕の目をまじまじと見つめてくる。とても言いたくない、絶対言ったら怒られる……。

「僕の身体に……」

これは言えない、けどこれも宿命なのだ。

「えっと、その……」

（早く言ってやれ）

もうこの現実からは逃れられない様だ……。

「舞に取り憑かれた」

（よく言った、やっぱり優はそれくらいの器を持ってないと困る）

「優ちゃん……冗談もいい加減にしてよ……」

「ごめん、そんなに怒るなよ。本当なんだ、頼むから信じてくれ！」

（血管浮き出てるよ、これは重傷だな。でもいい気味だ、アタシの優に手を出そうとしたからこんな目に遭うんだ）

明らかに怒っている……女の怒りは怖い、昨日身をもって体感したから間違いない。

「優ちゃんの悲しみが消えた所に潜り込んだな？」

（よく分かっているじゃないか、これからは優の悲しみは全部アタシと半分にして生きていこう）

「有紗……褒められてるよ？」

「殺す、優ちゃんさよなら。来世で会おう」

立ち上がりキッチンから包丁を持つてくる。もういつそのこと死んだ方が楽なのかもしれないと思えてきた。

（危ないな、少し身体を借りるぞ）

「ちよつと！ 勝手に！」

時すでに遅し、昨夜と同じ様な感覚に襲われ、腕も脚も動かず。

ただ視覚と聴覚だけが僕の身体とリンクしている。

「今日からアタシと優、それと妹さんと木偶と一緒に暮らすと思うと嬉しいよ」

「黙れ！」

有紗は包丁を振りかざすが能力を失い、身体能力が下がったのだろう。有紗は全く歯が立たず、そのまま包丁を奪われ一気に形勢逆転。

「さて、家族同士殺し合いは止めよう。大丈夫、アタシはそれほど身体を奪ったり、邪魔もしない。だから楽しく過ごしてくれ」

（舞……）

「ただ一つ優に言っておく、お前は悲しがる必要がない。優に取り憑いて分かった、お前は最高の幸せ者だよ」

ふつとすべての感覚が戻る。

「舞はまだいるの？」

……返事がない、消えてしまったのか？

「いないかも……返事が無くて分からない」

「一言だけ言っておく、約束は守る、だからそつちも守れ」

リビングに僕たちの笑い声が響き渡る。いつもの月森家に戻った瞬間だった。

舞からの返事はない、だが返事など聞かずとも答えは分かる。

「分かっただつて」

もちろん舞は一言も喋っていない、僕に返事をしろということなのだろう。だから僕は自分の気持ちをしっかりと伝えた、ただそれだけのこと。

その後、舞の声は一度も聞いていない。今では幻聴と幻覚が同時に起きていたのではないかと思うほど、舞は存在を一瞬たりとも現さなかった。

でも、いつも僕のどこかに潜んでいることは感じられた。

笑うときは一緒に笑い。

泣くときは一緒に泣き。

怒るときは一緒に怒り。

悲しいときは一緒に悲しんだ。

近くにいる存在を再認識しようとすることは難しい、まして近すぎる存在ならなおさら。

——僕はこれくらいがちょうど良い。

Y o u a r e n e a r b y .

最終章（後書き）

終わりです、ここまで読んでくださった方々本当にありがとうございます。

もし宜しければ感想、評価などいただけると光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9381c/>

弱さ故、強さ故

2010年10月8日15時54分発行